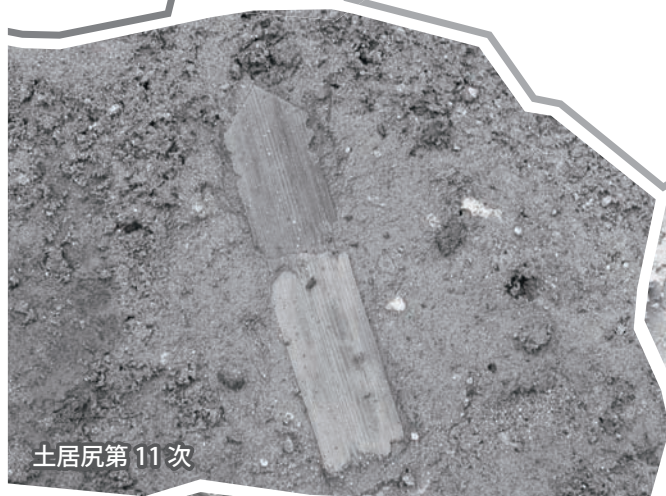


発掘された松本 2019

—松本市遺跡 発掘報告会—



土居尻第11次



大名町第3次



中山56号墳測量



上野遺跡第1次

日時：令和2年2月11日(火・祝)

午後1時～午後4時30分

会場：松本市勤労者福祉センター 大会議室

松本市教育委員会

発掘された松本 2019

～松本市遺跡発掘報告会～

次 第

令和2年2月11日（火・祝）

司 会 文化財課長 大竹 永明

13 : 00 開 会

13 : 00～13 : 05 挨拶 松本市教育長 赤羽 郁夫
(5 分)

13 : 05～13 : 15 趣旨説明・令和元年発掘調査の概要
(10 分) 担当 文化財課 三村 竜一

13 : 15～13 : 35 事例報告① 波田で発見！縄文文化の足跡
(20 分) (上野遺跡第1次発掘調査) 担当 文化財課 古林 舞香

13 : 35～14 : 05 事例報告② 中心街に眠る大武家屋敷 ～池の土全部掘りました！～
(30 分) (松本城三の丸跡大名町第3次発掘調査) 担当 文化財課 原田 健司

14 : 05～14 : 30 事例報告③ 武家地の下から現れた中世の祈りの形
(25 分) (松本城三の丸跡土居尻第11次発掘調査) 担当 文化財課 小山 奈津実

14 : 30～15 : 00 事例報告④ 先端技術が森に隠された古墳の姿を浮き彫りに
(30 分) (弘法山古墳と周辺古墳群測量調査) 担当 文化財課 竹原 学

15 : 00～15 : 10 休 憩
(10 分)

15 : 10～16 : 20 講 演 「中近世の治水・利水遺構と土木技術」
(70 分) 帝京大学文化財研究所 客員教授 畑 大介 氏

16 : 20～16 : 30 質 問
(10 分)

16 : 30 閉 会

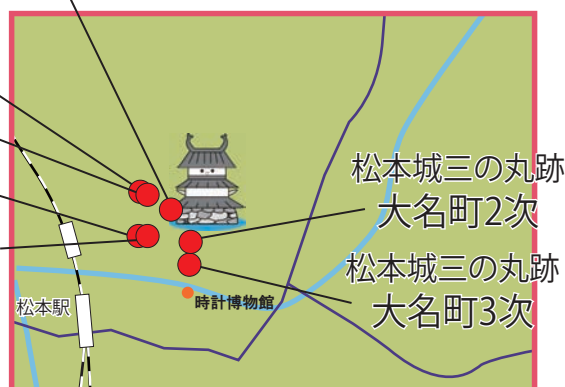
展示解説は2月15日（土）・22日（土）に行います。（時計博物館3階企画展示室）

令和元年の発掘調査遺跡



松本城外堀跡西外堀

松本城三の丸跡鷹匠町
松本城三の丸跡西不明門
松本城三の丸跡土居尻9次
松本城三の丸跡土居尻11次



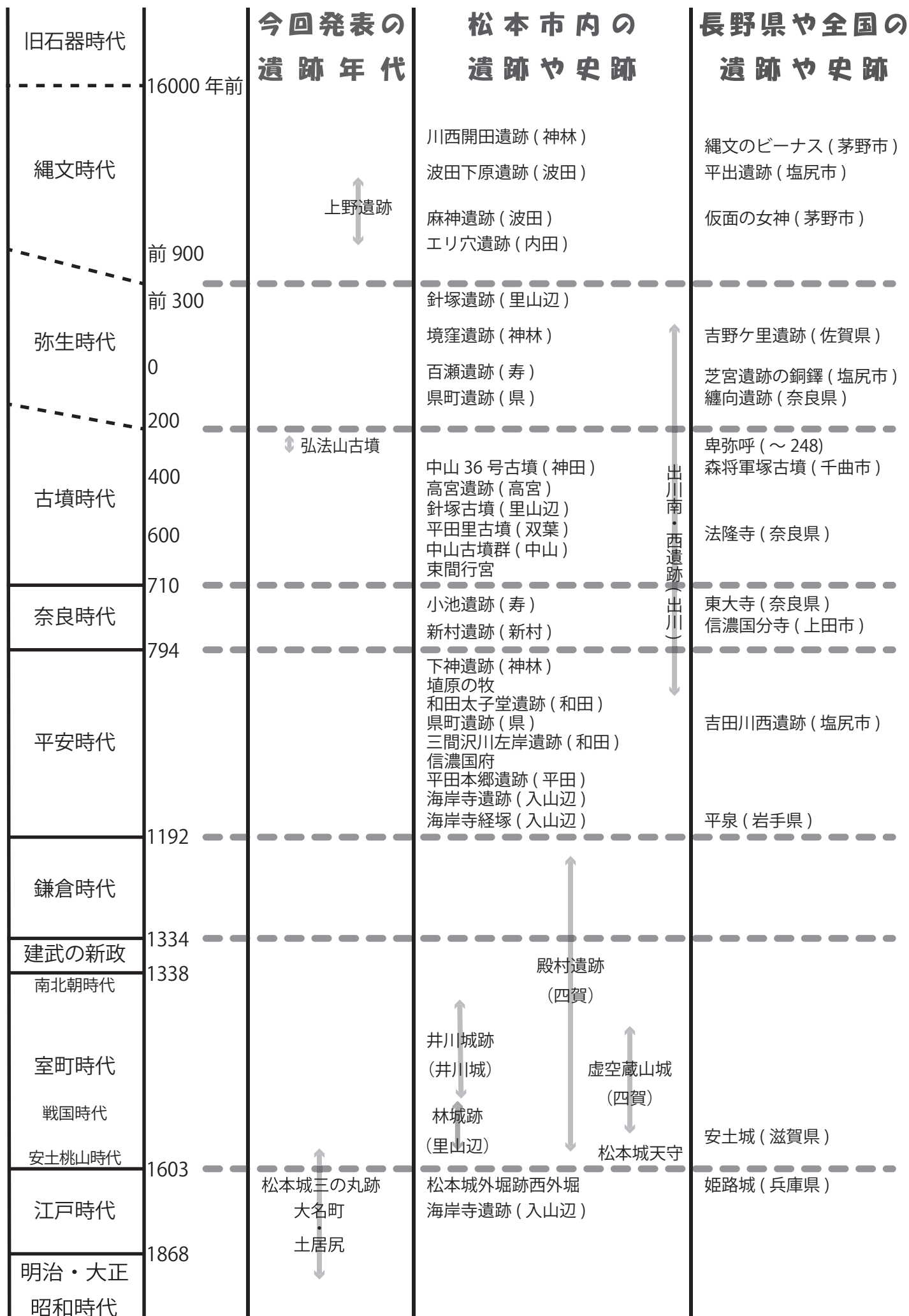
市街地中央部拡大図

令和元年(2019年)埋蔵文化財発掘調査、報告書刊行一覧表

No.	遺跡・調査名	調査期間	調査面積	調査原因	時代	特徴・備考
1	サン マルアト ドイジリ 松本城三の丸跡土居尻第9次	H28.10.24 ～H31.3.15	1,168㎡	都市計画道路(内環 状北線)建設事業	中世・近世・近現 代	武家屋敷
2	ソトボリ アト ニシソトボリ 史跡松本城外堀跡西外堀第4次	H30.6.25 ～H31.3.19	166㎡	松本城南・西外堀整 備事業	中世・近世・近現 代	城郭
3	サン マルアト ダイミョウチョウ 松本城三の丸跡大名町第2次	H30.8.20 ～H31.1.22	261㎡	都市計画道路(内環 状北線)建設事業	平安時代・中世・ 近世	武家屋敷
4	サン マルアト ニシアカズノモン 松本城三の丸跡西不明門第1次	H30.11.5 ～H31.3.29	138㎡	松本城南・西外堀整 備事業	中世・近世・近現 代	城郭
5	オガミ 麻神遺跡第3次	H30.11.8 ～H31.1.11	300㎡	畑地帯総合改良事 業	縄文・弥生時代	集落跡
6	タカジョウマチ 松本城下町跡鷹匠町第1次	H30.12.3 ～H31.3.29	240㎡	松本城南・西外堀整 備事業	近世	武家屋敷
7	サン マルアト ダイミョウチョウ 松本城三の丸跡大名町第3次	H31.4.15 ～調査中	3,300㎡	松本市基幹博物館 整備事業	中世・近世・近現 代	武家屋敷
8	サン マルアト ドイジリ 松本城三の丸跡土居尻第11次	H31.4.16 ～R1.12.26	1,173㎡	都市計画道路(内環 状北線)建設事業	中世・近世	武家屋敷
9	ウエノ 上野遺跡第1次	R1.8.19 ～R1.10.1	250㎡	送電線鉄塔移設事 業	縄文時代	集落跡
10	ヨウボウヤマコフン 弘法山古墳と周辺古墳群測量	H31.4.22 ～R1.9.30	—	史跡弘法山古墳再 整備事業(測量調査)	古墳時代	古墳
11	アガタマチ 県町遺跡第20次	R1.8.26 ～R1.10.30	114㎡	雨水幹線新設事業	弥生時代～中世	集落跡
12	市内遺跡確認調査	通年	—	試掘・立会	各時代	試掘
13	オガミ 麻神遺跡第3次 (整理、報告書作成、発行)	通年	—	畑地帯総合改良事 業	縄文・弥生時代	集落跡
14	ヨコタ 横田遺跡第3次 オオムラツカダ 大村塚田遺跡第3次 (整理、報告書作成、発行)	通年	—	土地区画整理事業	縄文～平安時代	集落跡
15	タイホウバラ 大輔原遺跡第10次 (整理、報告書作成、発行)	通年	—	乳児院建設事業	奈良・平安時代・ 近世	集落跡
16	イセマチ 松本城下町跡伊勢町第29次 (整理、報告書作成、発行)	通年	—	民間施設建設事業	近世	町屋跡
17	トノムラ 殿村遺跡第1～9次 (整理、報告書作成、発行)	通年	—	保存目的の確認調査	中世	社寺遺跡
18	ミナミ ニシソトボリ アト 史跡松本城南・西外堀跡 (整理、報告書作成、発行)	通年	—	松本城南・西外堀整 備事業	中世・近世・近現 代	城郭
19	サン マルアト ドイジリ 松本城三の丸跡土居尻第10次 (整理作業)	通年	—	松本城南・西外堀整 備事業	中世・近世	武家屋敷
20	サン マルアト ドイジリ 松本城三の丸跡土居尻第5次 (整理作業)	通年	—	松本城南・西外堀整 備事業	平安時代・中世・ 近世	武家屋敷
21	イガワジョウ アト 井川城址第3次 (整理作業)	通年	—	保育園建設事業	中世	城館跡
22	アガタマチ 県町遺跡第16・17次 (整理作業)	通年	—	保育園建設事業ほか	弥生時代・古代	集落跡
23	イデガワミナミ 出川南遺跡第17次ほか (整理作業)	通年	—	道路建設事業	弥生・古墳時代・ 古代・中世	集落跡

開発工事等による市内遺跡試掘確認調査一覧(令和元年)

No.	事業者	所在地	原因事業	調査面積 (㎡)	遺跡との関係		遺構 等の有無	検出遺構・遺物	備考	期間
1	民間会社	波田	送電線鉄塔	20.40	上野	該当	あり	土坑2基。時代不明遺物。	本調査	1月21、22日
2	個人	村井町南1丁目	集合住宅	7.00	村井	該当	なし			1月23日
3	民間会社	岡田下岡田	宅地造成	27.60	岡田松岡	該当	あり	古墳時代土師質土器。 時代不明ピット	記録保存	1月30、31日
4	個人	横田4丁目	老人福祉施設	14.40	大村立石	該当	なし			2月4日
5	松本市	村井町南2丁目	交差点改良	7.20	高畑	該当	なし			2月12日
6	民間会社	原	店舗	10.80	原五反田	該当	なし			2月14日
7	民間会社	県1丁目	店舗	9.60	県町	該当	なし			3月1日
8	個人	出川2丁目	集合住宅	8.00	白姫	該当	なし			3月12日
9	個人	中山	個人住宅	4.00	埴原の牧	該当	なし			3月18日
10	個人	並柳1丁目	集合住宅	13.20	開き松古墳	該当	なし			3月25日
11	個人	島内	戸建賃貸住宅	16.80	平瀬	該当	なし			4月15日
12	民間会社	北深志	寄宿舎	19.50	松本城下町跡(新町)	該当	なし			5月14、15日
13	民間会社	野溝西2丁目	事務所	9.60	野溝	該当	なし			5月20日
14	松本市	島内	災害時支援施設	48.00	平瀬	近接	なし			5月20日
15	民間会社	旭1丁目	事務所	9.60	岡の宮	該当	なし			5月27日
16	民間会社	波田	宅地造成	28.00	上野	該当	なし			6月4、5日
17	民間会社	高宮北	事業所	7.20	高宮	該当	なし			6月17、18日
18	個人	神林	個人住宅	3.60	下神	該当	なし			7月8日
19	社会福祉法人	神田1丁目	福祉施設	12.00	神田	該当	あり	弥生時代遺物	現状保存	7月11日
20	松本市	城西2丁目	土層調査	5.00	松本城跡(総堀跡)	該当	なし	土塁埋立土		7月11、12日
21	民間会社	波田	送電線鉄塔	6.00	上野	該当	あり	縄文時代遺構、 打製石斧等	本調査	7月26日
22	個人	岡田下岡田	宅地造成	10.80	岡田松岡	該当	なし	縄文土器(流入)		8月7日
23	松本市	中山	交差点改良	4.80	埴原の牧	該当	なし			8月29日
24	民間会社	寿中1丁目	集合住宅	9.00	百瀬	近接	なし			9月10日
25	松本市	丸の内	確認調査	6.00	松本城跡(北門跡)	該当	あり	江戸時代整地層	本調査	9月11日
26	個人	浅間温泉1丁目	戸建賃貸住宅	21.00	柳田	該当	なし			9月17日～20日
27	民間会社	寿小赤	宅地造成	12.00	北起し	近接	なし			10月1日
28	個人	神田1丁目	集合住宅	19.00	神田	該当	あり	古墳～平安遺物	記録保存	10月8日、9日
29	個人	今井	店舗	12.00	今井新田原	近接	なし			10月16日
30	個人	岡田松岡	集合住宅	6.00	岡田松岡	該当	なし			11月6日
31	松本市	芳野	市道改良	9.60	平田北	一部該当	なし			11月11日
32	民間会社	並柳2丁目	宅地造成	12.50	平畑	近接	なし			11月14日
33	民間会社	宮田	店舗	28.70	出川南	近接	なし			11月18日
34	民間会社	原	集合住宅	14.40	杵坂	近接	なし			11月19日
35	民間会社	筑摩3丁目	宅地造成	21.00	神田	近接	なし			11月26、27日



上野遺跡 第1次発掘調査

－ 波田で発見！縄文文化の足跡 －

1 調査の概要

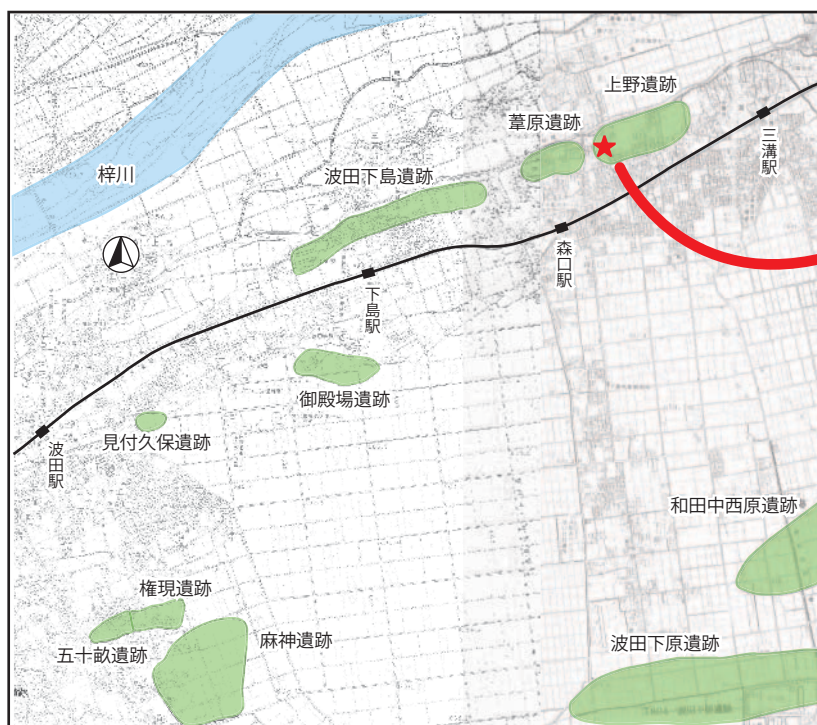
- (1) 遺跡の所在 松本市波田字上野
- (2) 原因事業 送電線鉄塔移設工事に伴う緊急発掘調査
- (3) 調査機関 令和元年8月19日～10月1日
- (4) 調査面積 約250㎡



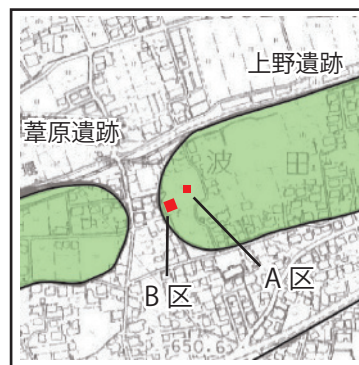
2 遺跡の概要

上野遺跡は波田地区の東部に所在する遺跡です。波田地区は縄文時代の集落遺跡が数多く存在し、中でも当遺跡周辺は遺構の分布密度が高い地帯のひとつです。

過去に発掘調査を行ったことはありませんが、これまでの現地踏査で縄文土器片や石器が採集されており、遺物の時期などから縄文時代中期を中心とした遺跡と推定されています。



上野遺跡 位置図



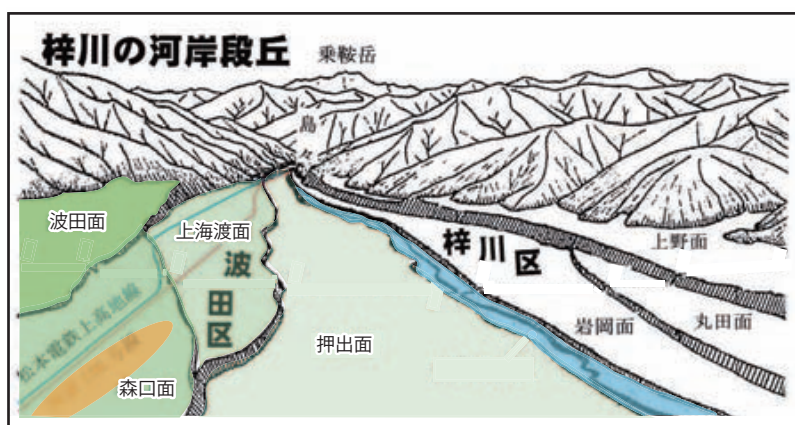
過去の上野遺跡出土遺物

3 周辺遺跡の様相

遺跡の位置する梓川右岸には4面の河岸段丘が形成されており、縄文時代の遺跡は一番高い段丘の波田面に多く存在します。当遺跡が所在する2段目の段丘面には3つの縄文遺跡が東西に並んでいて、上野遺跡はその東側に位置します。

西側の下島遺跡では平成7年に調査を行っており、縄文時代前期末から中期（約5500年前～）の竪穴住居跡と縄文土器が見つかっています。中央の葦原遺跡では、昭和39年～54年に松商学園高校によって計12回の調査が行われており、縄文時代中期から後期の集落が確認されています。竪穴住居跡のほか敷石住居跡（平らな石を床面に敷き詰めた住居跡）が複数見つかり、土偶や土製のスプーンなど特殊な遺物も出土していることから注目を集めました。

これらの遺跡はそれぞれで時期幅を持ちつつも、同段丘面上に連なる共通の集落の遺跡群としてとらえることが可能です。



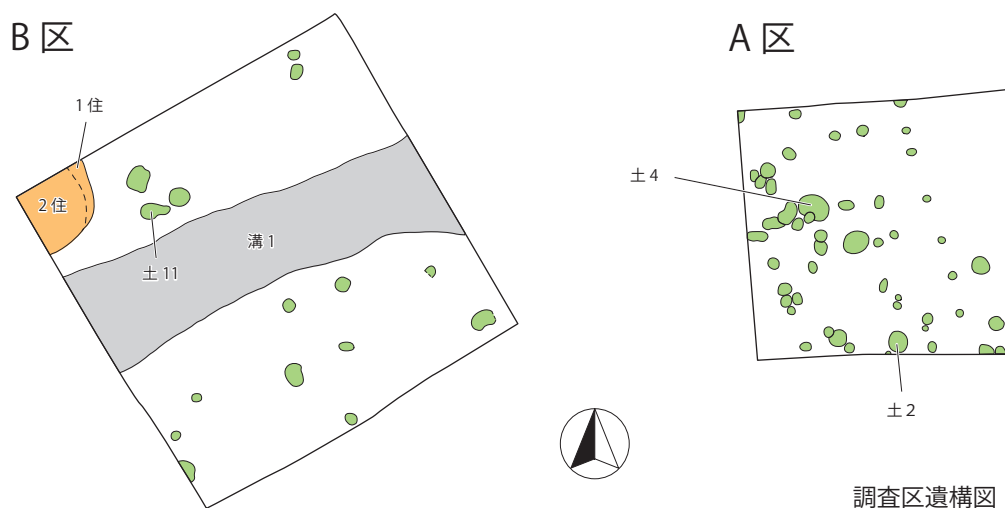
『波田地区地域学習テキスト 我々が愛する郷土』より加筆修正
段丘とは、河川の流れに沿って発達する階段状の地形のことです。



葦原遺跡出土の土偶・土製スプーン
『波田町誌 歴史現代編』（松商学園高校所蔵）

4 調査成果

A区（9×9m）、B区（13×13m）を設け、遺構面まで30～60cm程度掘り下げました。



ア 竪穴住居跡：2軒（B区 縄文時代）

調査区の西隅で確認されました。平面では1軒のように見えますが、断面や出土した石の位置をみると、それぞれ別に掘り込んでいる可能性が考えられました。全体の規模は直径4、5mほどと思われます。遺物は縄文土器や石器が少量出土しています。



1住 床面

柱を埋めたピットが2基と、被熱した石が散らばっています。



2住 石の出土状況

ワレ石が集中しており、大きな丸い石も1つ確認できます。



1・2住 完掘

炉などの施設が調査区外に存在する可能性があります。



1住・2住出土 石器・土器



竪穴住居 イメージ
(松本市立考古博物館)

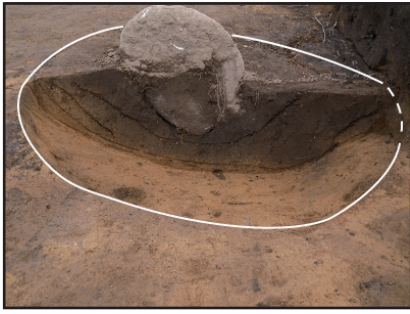
イ 土坑・ピット：66基（縄文時代・時期不明）

調査区の全体から多数確認され、中には土器や石が埋められた土坑も存在しました。



土4（A区）

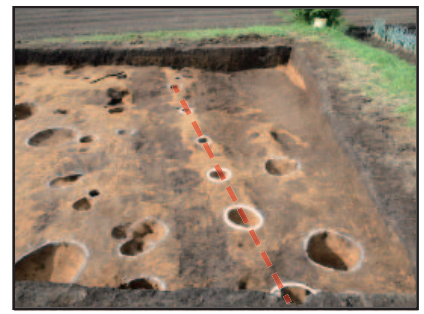
検出面上から土器片が、土坑の中心から深鉢ふかぼちが残りの良い状態で出土しました。土坑は直径約1m、深さ約25cmです。



土 2 (A 区)
穴の上層に大きな石が見つかりました。



土 11 (B 区)
浅い底に扁平な石が2つ、重なって出土しました。



A 区東側のピット列
いずれも似た大きさと、一列に並んでいるように見えます。

ウ 溝状遺構：1 本 (B 区 時期不明)

幅約 3 m、深さ約 30 c m 程度の大きな溝です。時期や用途は不明ですが、埋土からは石器・縄文土器片・中世の土器などが出土していますが、溝を作った際に混入したものと思われる。



検出状況
調査区の中心に、はっきりとした暗い帯状の溝が確認できます。



完掘状況
溝は完全にまっすぐではなく、わずかに南側に曲がります。



溝状遺構 出土石器

5 調査のまとめ

- ・縄文時代の竪穴住居跡と土坑など、集落の遺構が確認されました。調査区の西端で竪穴住居跡が確認されたことから、この集落の居住域は調査区より北側に存在する可能性が考えられます。
- ・遺物は中期中葉から後期（約 3000 年～ 5000 年前）の土器片が出土しており、長い期間人がこの遺跡で活動していたことがわかりました。
- ・溝は遺跡外へ続く可能性もあり、近隣の遺跡との関係が注目されます。
- ・中世の遺物が少量出土している点などから、付近に中世遺構の存在が窺えます。

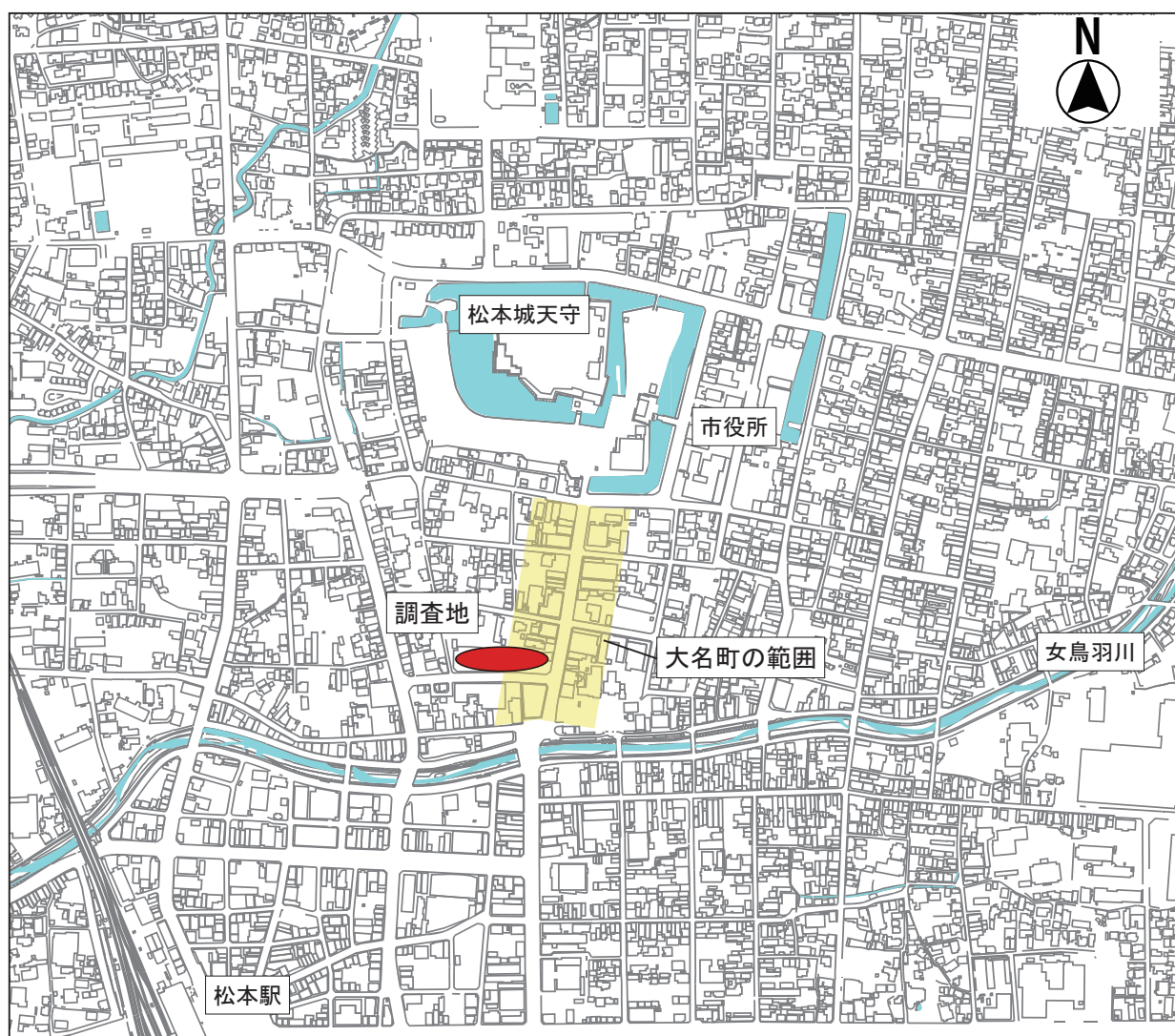
松本城三の丸跡大名町 第3次調査

中心街に眠る大武家屋敷 ～池の土全部掘りました！～



1 調査の概要

- (1) 所在地：松本市大手3丁目
- (2) 調査原因：松本市基幹博物館整備事業
- (3) 調査期間：平成31年4月～令和2年2月
- (4) 調査面積：のべ約3,300㎡（第1～3検出面の合計）
- (5) 主な遺構：池状遺構、礎石立建物、敷地境遺構、水道施設遺構、井戸跡、ごみ穴跡
- (6) 主な遺物：陶磁器（美濃焼の茶道具や雑器、肥前焼の食器、京焼の仏具など）
土器（^{やきしおつぽ}焼塩壺、^{ないじなべ}灯明皿、内耳鍋など）、木製品（下駄、桶、箸、荷札など）
その他（銅銭、^{きせる}煙管、砥石、碁石、骨、貝殻、木の実など）



2 遺跡の概要

松本城は本丸・二の丸・三の丸と、それらを囲む3重の堀（内堀・外堀・総堀）で構成される城郭部分、その外側に位置する城下町で成り立っています。三の丸には、家老をはじめとする役職についている家臣の屋敷が配置され、城郭の防衛ラインの1つとなっていました。このほか城郭の防御施設として南側中央には大手門枡形、東・西・北には馬出しと門が4カ所設けられていました。

大名町は、大手門を通ったすぐ先に位置し、特に上級武士が住んでいた場所です。武家屋敷は身分や役職に応じて与えられた官舎であったため、上級武士と下級武士では屋敷地の面積、居宅の規模、内部構造や機能などに格段の差がありました。大名町にいた武士は250～500石クラスで、500坪前後の広大な敷地が与えられていました。

大名町での発掘調査は過去に2回あり、1次調査では、武家屋敷跡や松本城の前身深志城の堀とも推定される遺構、2次調査では江戸時代の水道施設の他、古代から中世にかけての生活面が見つかりました。

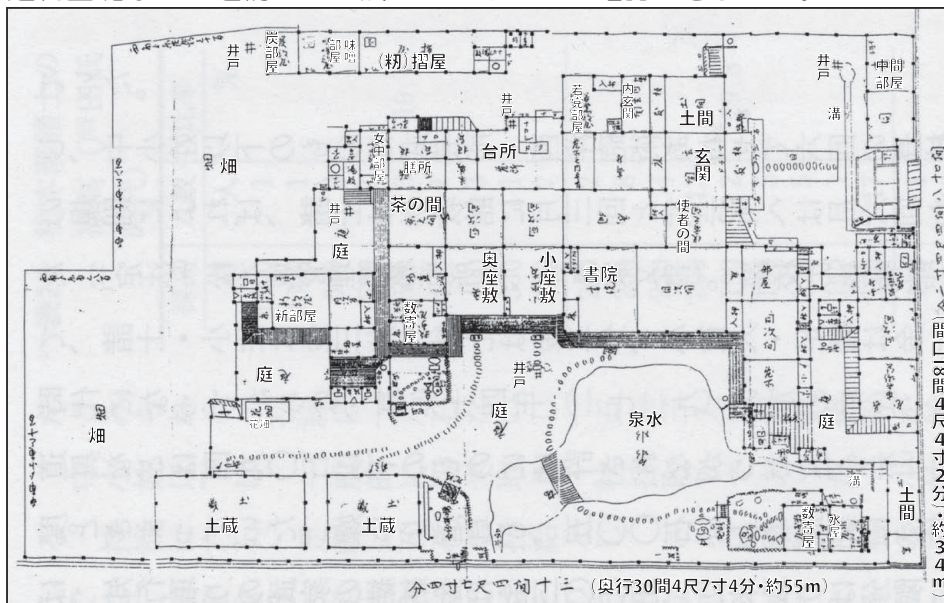


「享保十三年秋改松本城下絵図」（一部改・松本城管理事務所所蔵）

3 調査地点について

(1) 近世

18 世紀後半に本調査地に住んでいた戸田家の有力家臣である太田庄太夫という武士の屋敷図が残されています。図には、大名町通り側に立派な長屋門や、大きな屋敷、庭に池や数寄屋（茶室など）などが描かれています。発掘調査によって、図に描かれている畑や井戸、建物基礎などが遺構として残っていることが確認できました。



太田庄太夫家の屋敷図（「松本市史 第2 巻歴史編Ⅱ近世」より引用・追記）

(2) 近代

本調査地には、本願寺松本別院が建てられていました。明治9 年(1876) に本願寺の松本出張所が置かれ、同 13 年に別院に昇格しました。同 15 年(1882) には本堂・庫裏・表門などが竣工し、同 21 年(1888) 1 月には火災（明治の大火）で焼け落ちています。昭和 30 年頃に蟻ヶ崎へ移転しています。



昭和 10 年頃撮られたもので、写真中央に写る入母屋造の建物が本願寺松本別院の本堂です。
(HP:「松本の古写真」<http://matsumoto.photo/> より引用)

4 調査成果

(1) 「明治の大火」の痕跡と本願寺松本別院の本堂跡

地表から 30cm 程の深さで、土が赤く焼けた火災層が確認できました。火災層の中から見つかった陶磁器片から、明治 21 年の大火の痕跡を考えられます。

また、調査区中央付近で見つかったコの字型に延びる幅約 50cm の溝は、明治時代にあった本願寺松本別院の本堂周りの雨落ち溝である可能性があります。さらに、本堂内の一部が掘り窪められ被熱した大量の瓦や建築部材が出土しました。おそらく、これらは明治の大火で焼け落ちた本堂等の建物の部材が廃棄されたものでしょう。

本願寺松本別院の建物で使われたと考えられる
瓦等の廃棄場



本願寺松本別院の本堂範囲か
(赤い箇所は、雨落ち溝の跡)



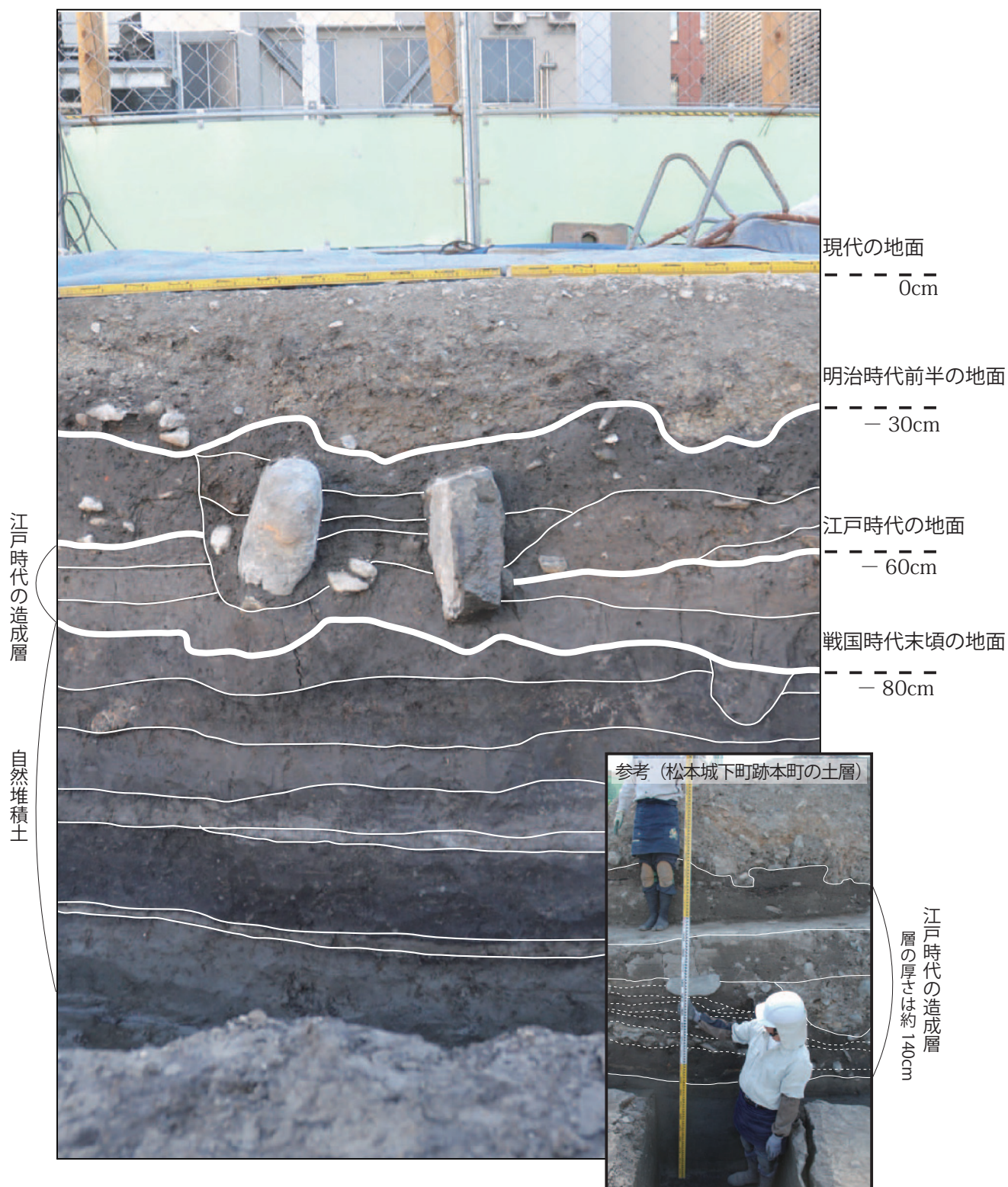
全景（南東から撮影）



明治の大火で赤く焼けた土

(2) 江戸時代の整地

これまでの三の丸跡や城下町跡の発掘調査から、ほとんどの地点において複数回の盛土造成が行われ、江戸時代だけで 1m 前後の造成層が確認できます。今回の調査では、20cm 前後の造成層しか確認できませんでした。これは何を意味しているのでしょうか。削平と盛土を繰り返して造成しているのか、元々この地の標高が高く意図的に盛土を行わなかったのか、などが考えられます。今後、調査地周辺での調査が増えればさらに理解が進むかもしれません。



(3) 上級武家屋敷

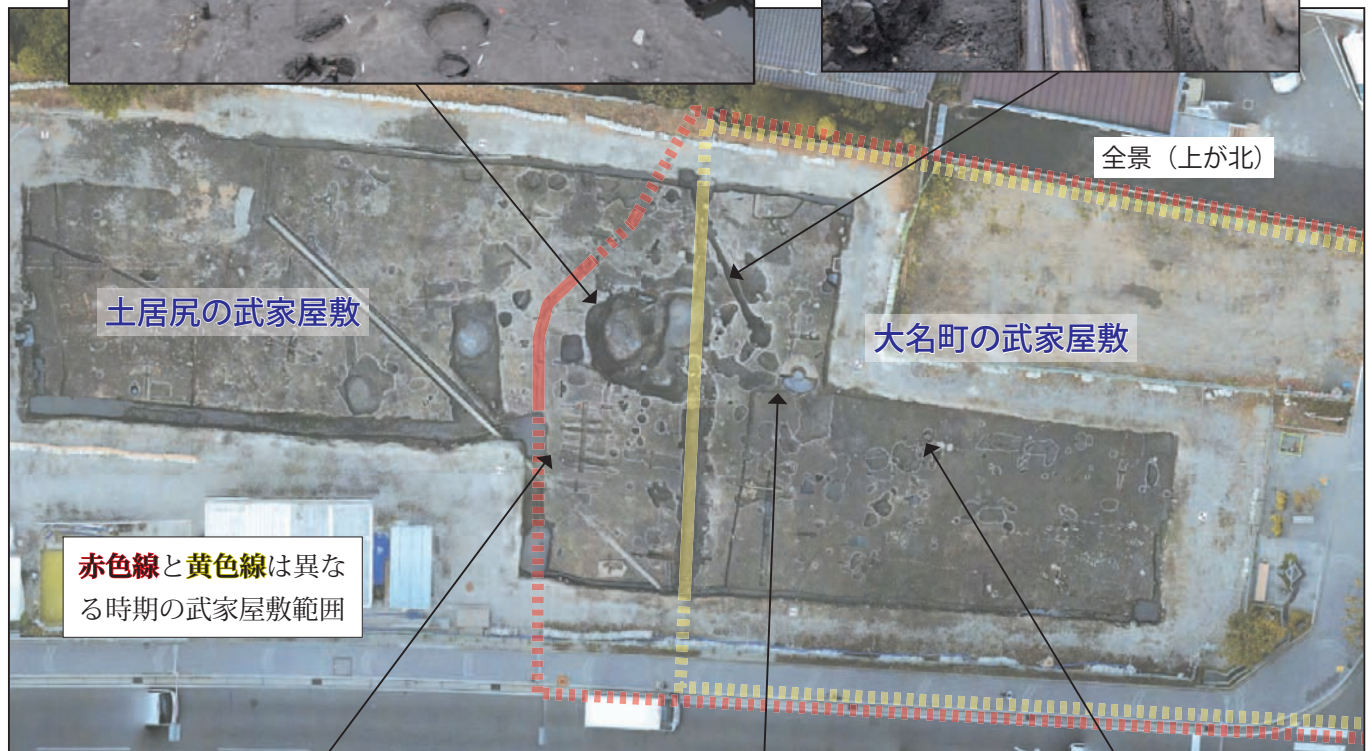
武家屋敷の家主は城主が変わるなど、事ある度によります。絵図などで分かっているだけで 10 回以上家主が変わったことがわかります。発掘調査で、家主の石高によって敷地面積や建物の配置も造り変えていることもわかりました。

調査では、江戸時代前半から後半までに掘られた穴がたくさん見つかりました。その中でも、長軸 10m を超える立派な池状遺構も見つかり、上級武士の優雅な生活の一面が垣間見ることができました。

湧き水が溜まった状態の池状遺構（長軸 10m 以上）



竹で造られた水道管と木製のジョイント



畝状遺構（畑の跡か）



桶を重ねて造った井戸跡



建物の基礎に使われた礎石

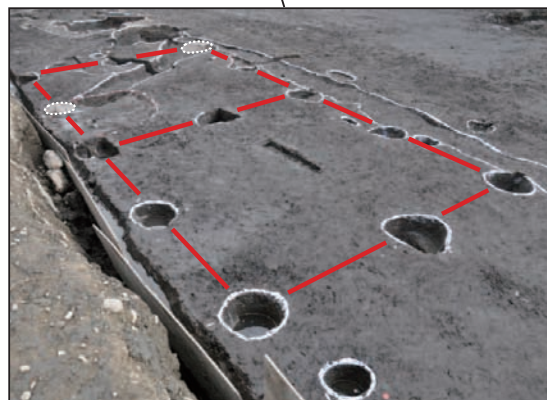
(4) 三の丸形成前の様子

江戸時代の層では、南北方向に延びる敷地境の溝跡しか確認できませんでした。三の丸が形成される前の戦国時代末頃は、東西に延びる溝跡も確認でき、江戸時代と異なる屋敷割りをしていたということがわかりました。

この他にも、2 間× 4 間の掘立柱建物跡や方形状に木枠を組んだ井戸跡などがみつかりました。



木の枠を組んだ井戸跡



2 間× 4 間の掘立柱建物跡



溝状遺構（敷地境の溝か）

5 まとめ

今回の調査の成果は以下のとおりです。

- (1) 明治 21 年のものと考えられる火災の痕跡を確認しました。
- (2) 明治 13 年～昭和 30 年頃にあった本願寺松本別院の本堂跡などを確認し、明治の大火で被災した瓦や建築部材を敷地内に廃棄していたことがわかりました。
- (3) 江戸時代に、盛土造成がほとんど行われていないことがわかりました。
- (4) 上級武家屋敷内の建物や庭園（特に池）の配置が変化していることから、江戸時代をとおして何度も建て替えていることが確認できました。
- (5) 三の丸形成以前は、まったく違った土地利用をしていたことがわかりました。

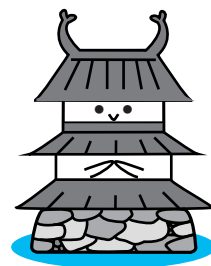


事例報告③

松本城三の丸跡土居尻第 11 次発掘調査 ～ 武家地の下から現れた中世の祈りの形 ～

1 調査の概要

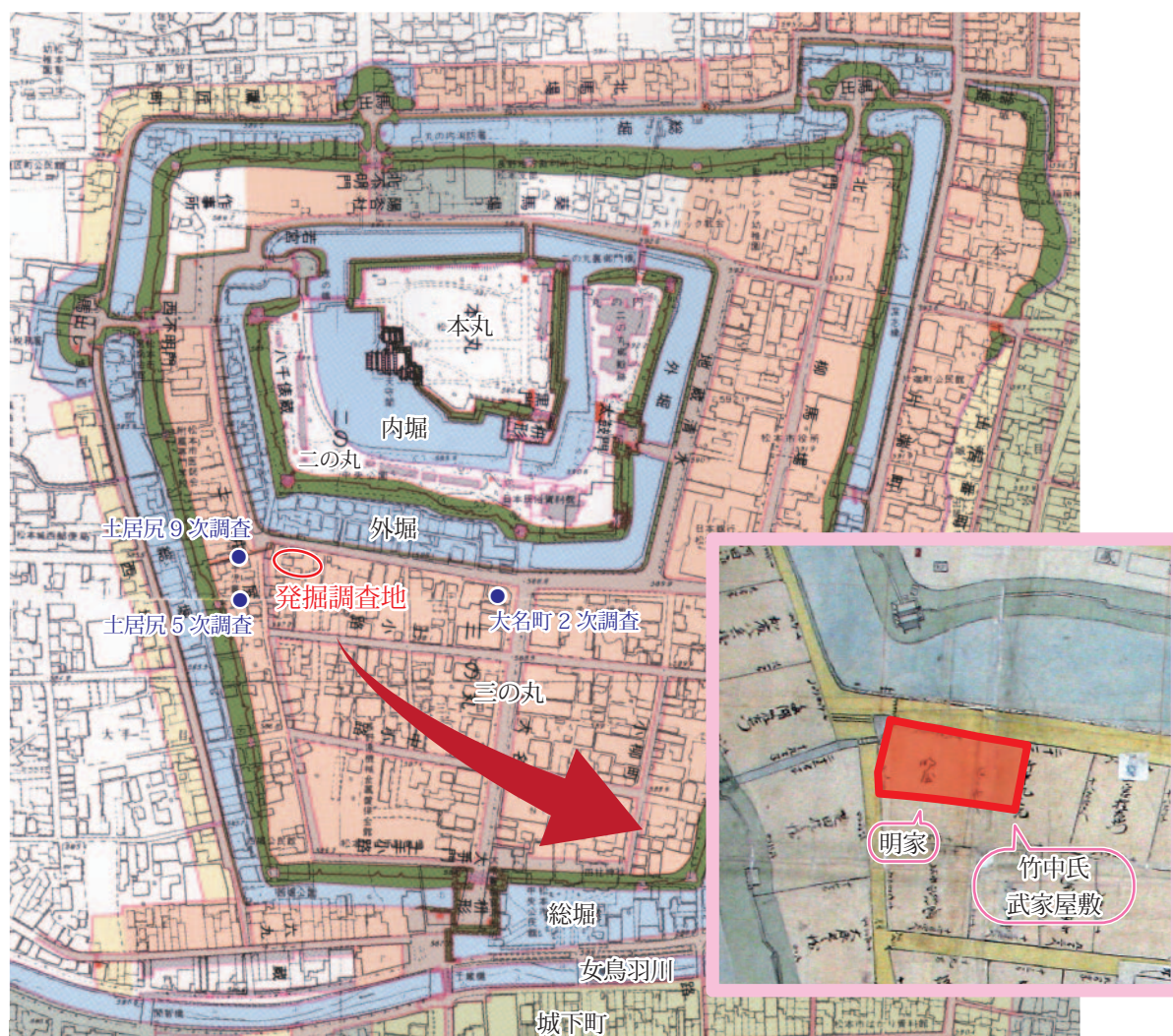
- (1) 遺跡の所在 松本市大手三丁目 38-4 ほか
- (2) 調査の目的 内環状北線整備事業に伴う緊急発掘調査
- (3) 調査期間 平成 31 年 4 月 16 日～令和元年 12 月 26 日
- (4) 調査面積 のべ面積 約 1,170 m² (平面積 約 430 m²)



2 遺跡の概要

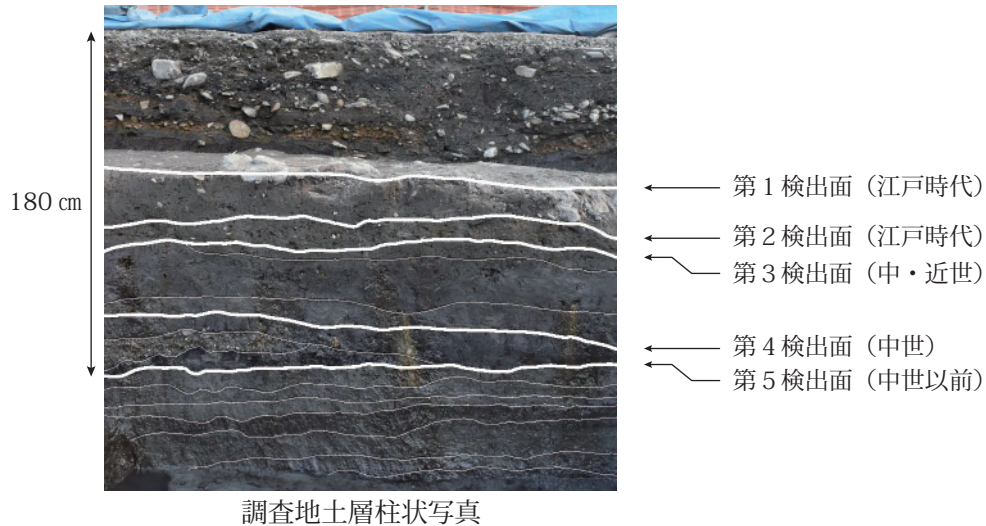
松本城は本丸・二の丸・三の丸と、それぞれを囲む 3 重の堀（内堀・外堀・総堀）で構成される城郭部分と、その外側に位置する城下町で成り立っています。江戸時代、三の丸には家老をはじめとする家臣の屋敷地などが立ち並んでいました。

今回の調査地は、三の丸の西端にある土居尻に位置しています。藩主・戸田時代の絵図に調査地を重ね合わせてみると、調査地の東半は竹中氏の屋敷地、西半は明家とされる箇所です。



『享保十三年秋改松本城下絵図』（1728 年）

3 調査成果



- (1) 遺構 建物跡 : 3 軒
土坑・ピット (ゴミを捨てた穴など) : 131 基
溝・自然流路 : 15 本
- (2) 遺物 江戸時代: かわらけ (素焼きの皿)、陶磁器 (瀬戸・美濃産、肥前産)、焼塩壺、
下駄、漆器椀、銭貨、煙管など
中世 : かわらけ、内耳鍋 (ないじなべ) (内側に提げ手を通す取っ手を付けた煮炊具)、青磁碗、
こけら経・笹塔婆 (ささとうば)、斎串状製品 (いぐし) (箸状の木製品) など
古代 : 黒色土器、須恵器 (すえき)
- (3) 江戸時代の遺構・遺物



建物跡 (北から)

南北に平行にのびる2本の溝の中には、杭が2列に打ち込まれています。建物の沈下を防ぐために基礎を固めていました。



ゴミを捨てた穴 (南から)

ゴミ回収のない当時、ゴミは各屋敷内で穴を掘り、処理をしていました。直径1.3mの穴からは、下駄や漆器椀が出土しています。



木材を検出した土坑 (東から)

木材の一部が残存しています。木材は周囲に石を入れることにより、固定していました。掘立柱建物の柱材の可能性が考えられます。



かわらけ

縁には煤が付着しており、灯明皿として使用されたものと思われます。



本町 8 次出土の焼塩壺



焼塩壺

粗塩を入れて蒸し焼きするための壺で、焼塩はこの壺に入れたまま出荷されました。

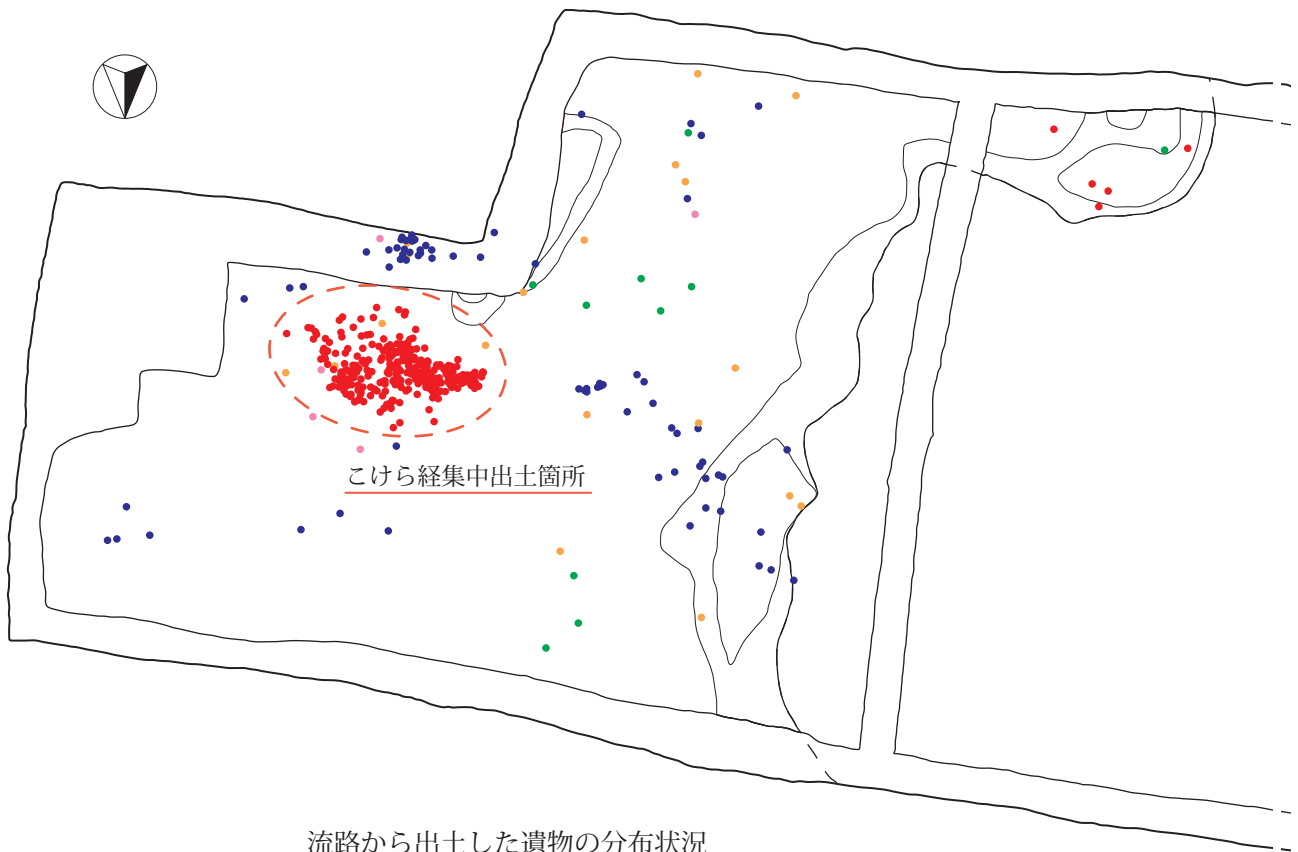
(4) 中世の遺構・遺物

① 流路

流路は、幅 6.5m、深さ 0.3m 程度で、南北方向にのびています。流路を埋めた土の様子から、流路は緩やかに水が流れていたと推測されます。流路からは、かわらけ、内耳鍋、こけら経・笹塔婆、斎串状製品、獣骨などがみつかっています。出土した遺物から、流路は 15 世紀後半から 16 世紀初頭のもものと推定されます。



流路の完掘状況（北から）



流路から出土した遺物の分布状況

●: こけら経 ●: 笹塔婆 ●: 斎串状製品 ●: 火付け木 ●: 獣骨

● こけら経と笹塔婆 ●

こけら経・笹塔婆は短冊形の木の薄片（長さ 25 ～ 30 cm、幅 1 ～ 3 cm、厚さ 0.05 ～ 0.1 cm）に経文あるいは仏や菩薩などの名号を墨書したものです。

こけら経には経文が墨書されており、20 枚または 40 枚を一組に束ねて納めていました。これは死者への追善供養や生前に後生安楽を祈るためのものとされます。

笹塔婆には仏や菩薩などの名号が墨書されています。束ねて使用するこけら経とは異なり、1 枚で完結するものです。

南無大日如来

笹塔婆イメージ図



こけら経（静岡県 仁田館遺跡）

出典：http://kannami13.sakura.ne.jp/culture-kokera.html



流路から出土したこけら経

幅 1.2 cm 程度のこけら経が大量にまとまって出土しました。中には経文が墨書されたものもありました。



流路から出土した笹塔婆

長さ 20 cm、幅 1.5 cm の成品には、「キヤカラバア」という、五輪塔と同じ文字が墨書されています。



流路から出土した笹塔婆

長さは 26 cm 程度で、頭部には五輪塔を意識したと思われる切り込みが見られます。



流路から出土した卒塔婆

長さ 13 cm、幅 2.5 cm、厚み 0.5 cm で、頭部には左右に 2 本の切り込みが見られます。



流路から出土した斎串状製品

長さ 20 cm 程度の箸状で、頭部は圭頭状（山形）、先端は串状になっています。祭祀具として使用されたと考えられます。



流路から出土したかわらけ



内耳鍋イメージ図

出典：https://www.pref.yamanashi.jp/matzou/bunk/topics/201300/0226.html



流路から出土した内耳鍋

② 整地土から出土した笹塔婆

笹塔婆は 15 世紀後半～ 16 世紀初頭に整地をしたとされる土の中から 40 点ほど出土し、「南無大日如来」や「キャカラバア（梵字）」と墨書されているものもありました。

調査地の周辺では、土居尻第 9 次調査、大名町第 2 次調査でも同様の出土事例が確認されています。



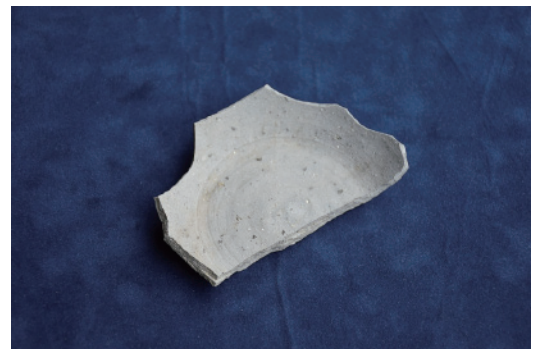
整地土から出土した笹塔婆
頭部は圭頭状（山形）をしており、「南無大日…」と墨書されています。

(5) 古代（平安時代）の遺構・遺物

今回の調査で遺構は確認できませんでしたが、黒色土器や須恵器などの遺物が見つかりました。調査地の周辺では、土居尻第 5 次調査で平安時代の掘立柱建物や溝を確認しています。また、大名町第 2 次調査では平安時代の土坑が見つかり、中からは黒色土器や須恵器の杯が出土しました。



黒色土器

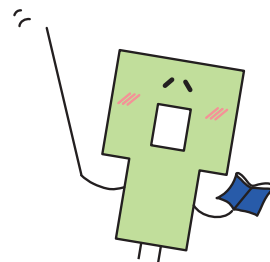


須恵器の杯

4 まとめ

- (1) 江戸時代の生活面では、建物の基礎やゴミ穴などを確認し、当時の人々の生活の様子を窺い知ることができました。
- (2) 中世の流路からは、こけら経・笹塔婆、斎串状製品など、祭祀に関わるとされる遺物が多数出土しました。この流路や遺物の詳細については今後さらに検討していきます。また、整地土の中からは笹塔婆が 40 点程出土しました。整地のために運び込まれた土の中に混ざっていたと推定され、このことから、調査地周辺には寺院があった可能性も考えられます。これらの成果は松本城築城以前のこの辺り一帯の様子を知る手掛かりとなりました。
- (3) 古代の遺構は確認されませんが、黒色土器や須恵器などの遺物が見つかりました。松本城周辺には古代の集落がある可能性を示唆しています。

弘法山古墳と周辺古墳群測量調査



1 調査の概要

- (1) 所在地 松本市神田 1 丁目、並柳 1・2 丁目、中山
- (2) 調査目的 史跡弘法山古墳再整備事業に伴う調査
- (3) 調査期間 令和元年 5 月～9 月
- (4) 調査対象 弘法山古墳、棺護山古墳群、中山北尾根古墳群（中山古墳群の北端に位置）

2 調査の方法

今後発掘調査を予定する弘法山古墳と周辺の関連古墳群について、事前に古墳の現状や周辺地形を詳細に把握するため、東海大学・早稲田大学の協力や専門業者への委託により、異なる 3 種類の技術を導入して古墳や地形を計測し、等高線図や赤色立体地図などの地形図を作成しました。

- (1) 航空三次元測量による古墳群全体の詳細地形測量
ヘリコプターに搭載した三次元レーザースキャナーから古墳と周辺地形を精密に測定し、等高線地形図と赤色立体地図を作成
- (2) 地上三次元測量による古墳の詳細測量
地上に設置した三次元レーザースキャナーから古墳を精密に測定し、等高線図を作成
- (3) 平板測量による古墳の詳細測量
平板、レベル、距離測定器を用いて人力により古墳の形を計測し、等高線図を作成

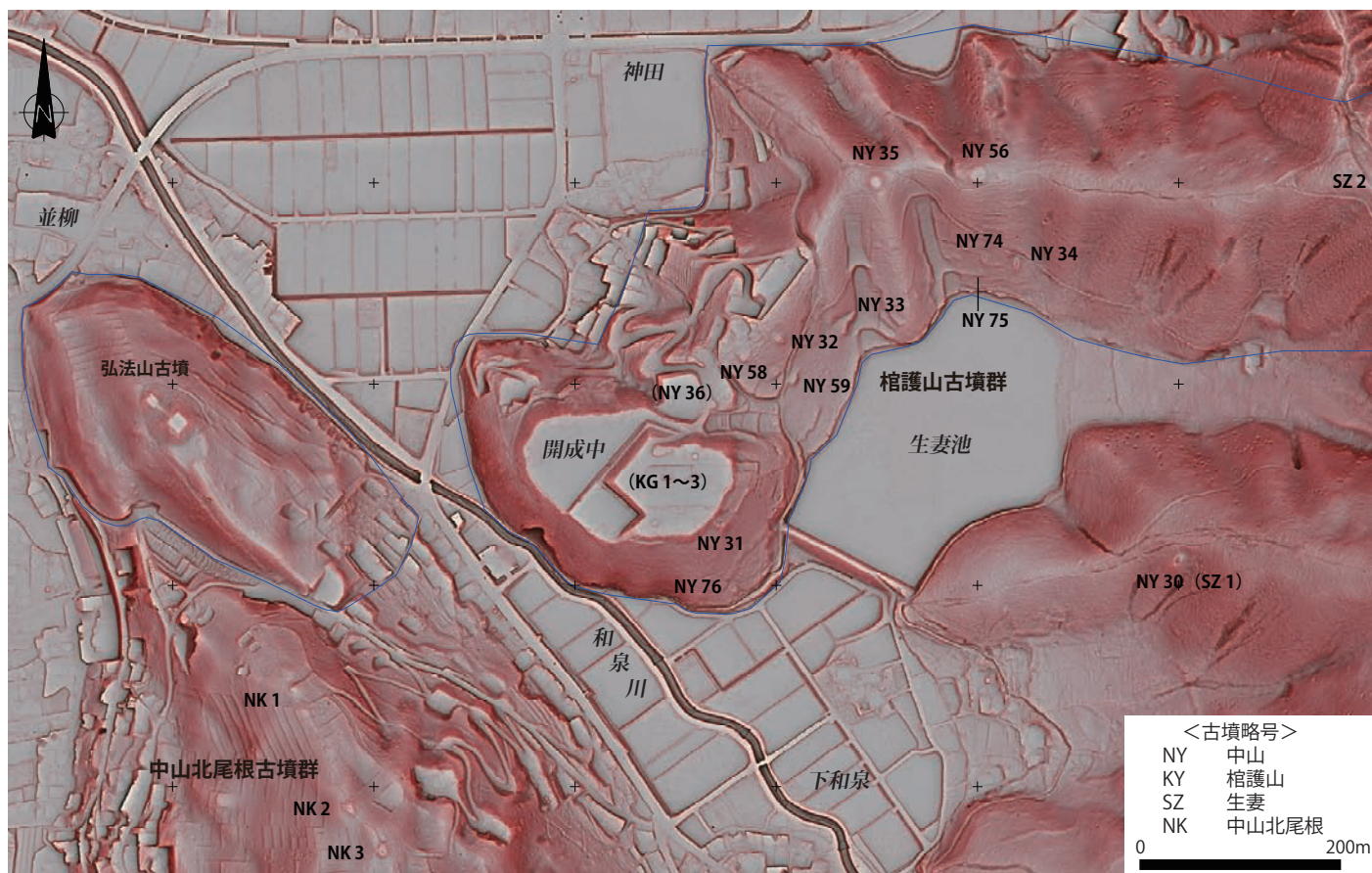


図 1 古墳の位置（赤色立体地図）

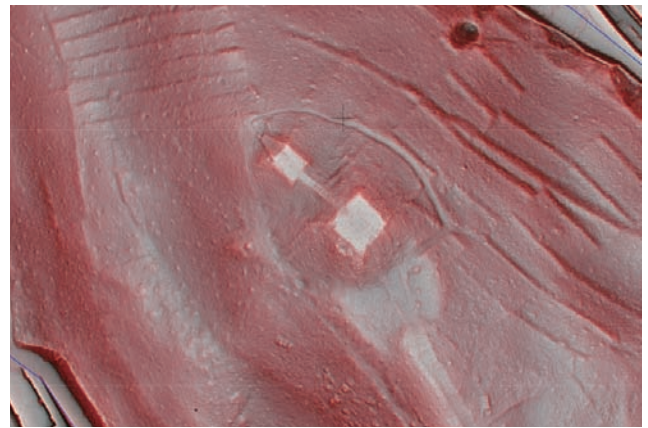
3 調査の結果

(1) 弘法山古墳

松本平を見下ろす中山丘陵の北端に立地する全長 66m の古墳です。昭和 49 年の発掘で東日本最古級、3 世紀末に築造された前方後方墳と判明し、昭和 51 年の国史跡指定、57 年の史跡公園開園を経て、現在は市内有数の桜の名所として多くの市民に親しまれています。

近年、静岡県高尾山古墳の発掘を契機に東日本の古墳出現期に関心が高まっており、同時期に築かれ大きさや副葬品の内容に類似点が多い弘法山古墳に再び注目が集まっています。昭和 49 年の調査は後方部の竪穴式石室を主体とした限定的な範囲にとどまったため、古墳の正確な形や大きさ、墳丘表面や盛土の状況など未解明な部分が多く、今後再び発掘調査を実施して再整備を進めることになりました。

今年度はその第一歩として詳細地形測量を実施した結果、古墳の現在の状況や周辺の地形、地割の状況を確認することができました。



赤色立体地図で見る弘法山古墳の姿



昭和 49 年の発掘で姿を現した竪穴式石室



弘法山古墳から出土した銅鏡

後漢時代の中国で作られた鏡で、「上方作系浮彫式獸帯鏡（じょうほうさくけいうきほりしきじゅうたいきょう）」と呼ばれます。静岡県高尾山古墳など各地の前期古墳から同じ形式の鏡が出土しています。



弘法山古墳から出土した土器

竪穴式石室の上から多量に出土した土器のほとんどが東海地方の特徴を有する形や文様のもので、地元の土器の特徴がほとんどかぎえないことから、被葬者は東海地方と深い関係にあった人物と推定されます。器形は壺、高杯、手あぶり形土器がみられます。

古墳を東に望む南松本駅西側一帯に広がる出川西遺跡からも東海地方の特色を示す同じ時期の土器が多数出土しており、被葬者が拠点とした集落だった可能性があります。

(2) 棺護山古墳群

弘法山古墳（中山丘陵）の東、和泉川を挟んで向かい合う棺護山（かごやま）丘陵にある古墳群です。今回の測量で新たに 3 基の古墳を確認しました。

古墳は大きく 3 時期に区分され、時期によって立地や墳丘の形態、埋葬施設が大きく異なっています。

○古墳時代前期（3～4 世紀）

古墳：中山 36 号墳（開成中学校のプール付近にあった）、35 号墳、56 号墳

立地：神田方面を見下ろす尾根の頂上に点在

特徴：36号墳からは弘法山古墳と同種の銅鏡や土師器が出土・・・考古博物館に常設展示

○古墳時代中期（5世紀）

古墳：棺護山1～3号墳（開成中学校校地内にあった）

立地・特徴：尾根の頂部にあり、鉄鏃や鉄刀・鉄剣、土師器・須恵器が出土・・・速報展に展示

○古墳時代後期（6～8世紀初頭）

古墳：中山31～34、58・59、74～76、生妻（しょうづま）1号墳（74～76は新発見）

立地：生妻池に臨む南向き斜面（1号墳は池の南の尾根）に造られた横穴式石室を有する古墳
今回の測量により、中山35号墳と56号墳は直径20m弱の整った円形の墳丘を有し、頂上が明確な平坦面をなしていることが確かめられました。立地や墳丘の特徴から、弘法山古墳や中山36号墳と同じ前期古墳の可能性が高まりました。

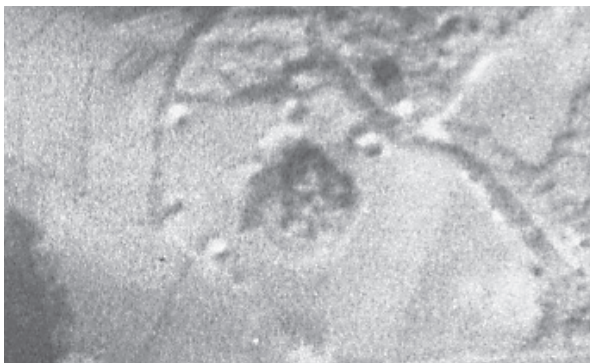
斜面上の古墳は盗掘や開墾によって横穴式石室の天井が破壊され、落ち窪んだ姿が捉えられました。また今回見つかった中山74・75号墳からは須恵器などの遺物も多数採集されました（速報展に展示）。その時期をみると、75号墳は7世紀末～8世紀初頭に造られた中山古墳群の中でも最末期の段階の古墳であることが分かります。

生妻2号墳は現地踏査の結果墳丘が非常に小さく、古墳ではない可能性が高まりました。

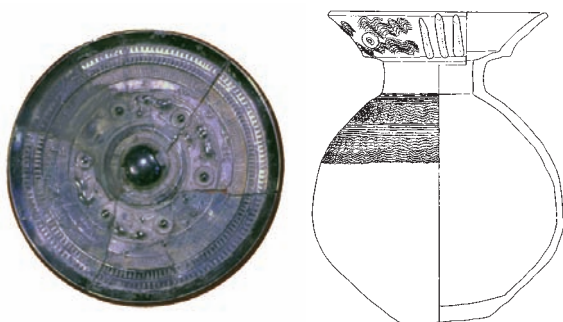
(3) 中山北尾根古墳群

弘法山古墳から南に続く尾根上に点在する3基の古墳です。昭和初期に発掘された1号墳を含めその詳細は不明ですが、発掘時の所見と尾根上の立地からみて前～中期の古墳と推定されます。

今回は1号墳の測量を実施しました。当初前方後円（方）墳の可能性もありましたが、測量の結果方墳または円墳と判断されました。さらに航空三次元測量により古墳群を含む中山丘陵一帯が早くから開墾され、古墳もその影響により変形していることが分かりました。



中山36号墳（昭和20年代米軍撮影）
平成7年の再発掘で墳丘が方形であることを確認



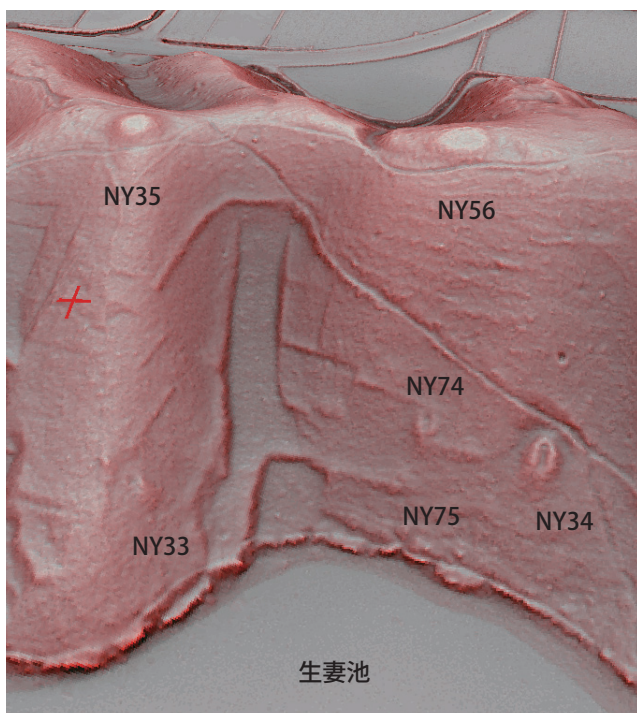
中山36号墳出土の鏡と土器（鏡は弘法山と同じ形式）



中山75号墳（今回新発見）で採集された土器

中山古墳群としては最終末期にあたる7世紀末～8世紀初頭の須恵器で、古墳の時期を示します。高台付きの杯や蓋、平瓶などが見つかりました。

左上は文様が刻まれた縄文時代中期（約5000年前）の土器です。中山周辺は縄文時代の遺跡の集中地帯でもあります。

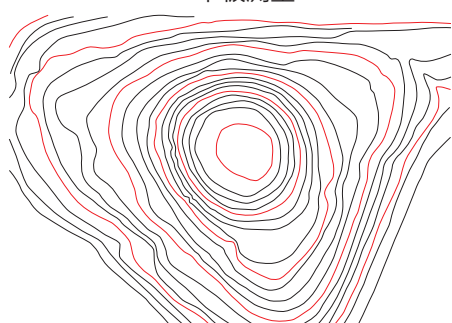


赤色立体地図が捉えた棺護山古墳群の主要部



東海大学学生・院生による平板測量と図面

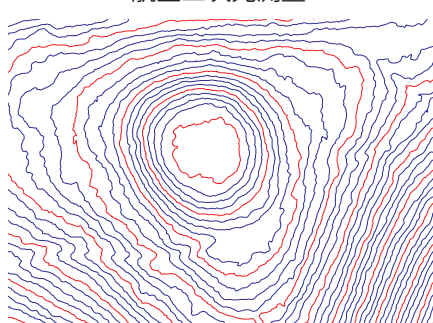
平板測量



等高線25cm間隔
作図:東海大学

平板・アリダード・ボール・巻尺(測距器)
・レベルを使って計測
古典的な方法で精密さには欠くが簡便
測量者の主観が反映された図となる

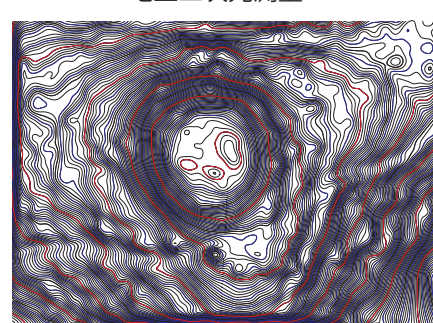
航空三次元測量



等高線25cm間隔
作図:アジア航測(株)

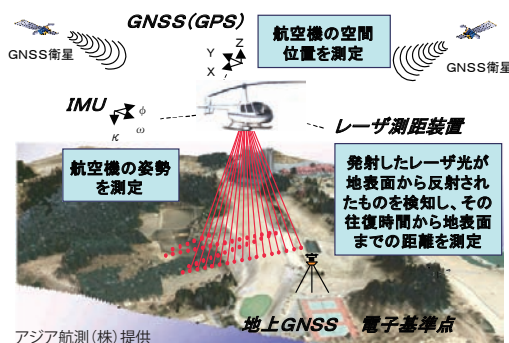
ヘリコプター搭載の三次元スキャナで計測
上空から計測するので広い範囲を森林等に
影響されず精密に計測可能

地上三次元測量



等高線5cm間隔
作図:早稲田大学

地上型の三次元スキャナで計測
至近距離から高密度なレーザーを
発射して計測するので非常に精密



3つの異なる測量技術で計測した中山35号墳の墳丘測量図

4 今後の調査

専門家の指導の下で弘法山古墳の発掘調査を実施し、これまで未解明だった古墳の価値を明らかにします。棺護山古墳群や北尾根古墳群もさらに測量を進めるとともに、一部の古墳は発掘調査を行い、弘法山古墳との関係を明らかにします。

中近世の治水・利水遺構と土木技術

畑 大介（帝京大学文化財研究所）

1 古代

河川堤防

- ①鶴町遺跡堤防状遺構（福岡市、弥生時代後期～古墳時代前期）（図1、福岡市教育委員会 1976）横木杭留め
 - ②顔戸南遺跡堤防（岐阜県御嵩町、4 席前半～5 世紀前半）（図2、小野木 2000）横木杭留め
 - ③亀井遺跡堤防（大阪市、古墳時代中期）（図3、大阪文化財センター1980）土砂堤防、杭列、敷葉工法
 - ④百間川米田遺跡堤防（岡山市、10 世紀後半）（図4、岡山県文化財保護協会 2002）杭・柵・草本類・小枝を多用
- * 広瀬和雄氏は古墳時代の堤防について、横木を杭で固定する木組みの芯構造をもったもの（①②）と、芯構造をもたず土を積み上げたもの（③）に分類（広瀬 1991）。

池堤防

- ①狭山池（大阪狭山市、7 世紀前半～）（狭山池調査事務所 1998）当初は敷葉工法、のちに重源が樋を修復

用水路

- ①女堀（群馬県赤城山麓、12 世紀）幅 20～30m、長さ約 13 km 未完

2 中世

河川堤防・護岸施設

- ①寝屋川堤防（大阪府門真市、古代末～中世初頭）（図5、辻 2008）杭・木・草本類・枝葉層とシルト層交互
 - ②園瀬川護岸施設（徳島市、12 世紀末～15 世紀前半）（徳島県埋蔵文化財センター2017）石敷き護岸、石積み、船着き場？
 - ③球磨川堤防（熊本県多良木町、13 世紀中頃～）（熊本県教育委員会 1977）石積み堤防、東国御家人相良頼景館
 - ④柿田遺跡堤防SW43（岐阜県可児市・御嵩町、13 世紀後葉～15 世紀後葉）（図6、岐阜県教育文化財団 2005）横木・砂礫・本類・樹皮
 - ⑤古利根川堤防（埼玉県杉戸町、中世）（図7、杉戸町教育委員会 2015）土砂堤防、敷 24m 以上、高さ 5.8m 外高斜積工法⇒☆
 - ⑥中貫川堤防（北九州市、16 世紀）（図8、北九州市芸術文化振興財団 2006）石積み堤防
- * 古代的な杭・横木・草本類・枝葉などの植物材料の多用（①③）と土堤防（④）に加え、石材の活用（②③⑥）が顕著に。

☆中世前期の大規模堤防による沖積低地開発

- ・13 世紀初頭の鴨長明『発心集』「武蔵国入間河沈水ニ会事」には「大キナル堤ヲ築テ水ヲ防テ、其中ニ田畠ヲ作リツ、在家多ク居タル処有リ」。
- ・弘安3年（1280）に飛鳥井雅有が記した『春のみやまち』は、墨俣（岐阜県大垣市）の様子について「河より遙かに里は下がりたり。前に堤を高く築きたれば、山の如し。くぼみにぞ家どもはある」。
- ・『吾妻鏡』によると、関東各地では幕府が直接関わり、大規模な築堤による開発が進められた模様。

☆外高斜積工法の展開

- ・古利根川堤防の構造上の特徴としては、盛り上げ方の手法として、川側が常に高くなるように斜めに積み上げられている点。この手法は中世城館の堀に隣接する土塁でも散見され（小野 1992、原 2000）、山口均氏は「外核式叩き土塁」に分類し、いくつかの利点を挙げつつ、堀への土塁の崩落を防ぐ構造としている（山口 2001）。この外側（川側・堀側）が高く、内側（陸側）が低くなる積み上げ工法（構造）を「外高斜積工法（構造）」と呼ぶ。
- ・この工法は、いつ、どこからもたらされたのか。太宰府市の水城では「傾斜版築」がみられ（林 2016）、佐賀県武雄市のおつぼ山神籠石系山城でも版築層の傾斜がみられるため（小田 2016）、朝鮮半島から伝来したか。一方東国では福島県会津坂下町の陣が峯城跡（12 世紀前半）の土塁（図 9、会津坂下町教育委員会 2005）や、群馬県伊勢崎市に所在する女堀赤堀地区 A 区の掘削排土の例（図 10、伊勢崎市教育委員会 2015）などがあり、平安末期にはこの工法が広がっていたとみられる。
- ・松本城外堀跡の試掘調査でも、傾斜する二の丸整地層が確認されているが、関係するのか。

堰

- ①城山遺跡堰（大阪府、13 世紀前葉頃）（図 11、大阪文化財センター1986）杭・ムシロ・竹束・シルト・粘土
 - ②柿田遺跡堰 SW49（可児市、13 世紀中葉）（図 12、岐阜県教育文化財団 2005）杭・シルト・粘土・樹枝
 - ③川久保遺跡堰（中野市、13 世紀後半）（図 13、長野県埋蔵文化財センター2013）横木・木根・杭
- *身近な資材を駆使。土砂・シルトは自然堆積か、人為的かを判断する必要あり（②）。

3 中世・近世移行期

河川堤防・護岸施設

- ①宇治川太閤堤（宇治市、文禄 3 年 [1594]）（図 14、宇治市教育委員会 2009・2010）石敷き護岸、石出し、杭
 - ②紀ノ川護岸施設（和歌山県かつらぎ町、1600 年前後）（図 15、和歌山県文化財センター2000）石敷き護岸
 - ③旧利根川堤防（加須市、16 世紀末～）（図 16、埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2019）土砂堤防（土山を一系列に並べるように盛り、谷部分に土を入れて馬踏みの高さを揃える）
- *①②は石敷きで、適した石材を運び込んで使用し、船着き場とする見方あり（園瀬川護岸施設も同様）。

4 近世

河川堤防・護岸施設

- ①大野堤防（山梨県身延町、近世）（図 17、身延町教育委員会 2014）石積み堤防、出し、堅籠
 - ②かすみ堤（山梨県昭和町、17 世紀後半？）（図 18、昭和町教育委員会 1997）土砂堤防（一部石敷き）、根籠、圪樋
 - ③仁淀川護岸施設（土佐市、17 世紀後葉）（高知県文化財団 2012）石積み護岸、船着き場？猿尾？
 - ④衣川堤防（岩手県平泉町、17 世紀後半～18 世紀前半）（平泉町教育委員会 2004）石積み堤防、杵類
 - ⑤大和川堤防（藤井寺市他、宝永元年 [1704]）（図 19、安村 2004 他）土砂堤防、杭列、表面に芝？
 - ⑥理兵衛堤防（長野県中川村、1750～1808）（中川村教育委員会 2009）石積み堤防、川表側の段に水路
 - ⑦乳川石堤（大町市、1817）（図 20、長野県埋蔵文化財センター2004）石積み堤防
 - ⑧石川除（飯田市、1828～31）（飯田市教育委員会 2015）石積み堤防、水門、胴木
 - ⑨海岸寺沢石堤（松本市、近世）（松本市教育委員会 2010）石積み堤防
- *石積み堤防が一般化。ただし、河川工事における石材の使用は、その周辺に石材が存在するか否かに大きく左右される。杭は存続するがそれ以外の植物素材の使用は衰退。⑦⑨は河川や沢が山麓から平地に向かう傾斜地に築かれたもの。

☆霞堤について

昨年10月の台風19号により、千曲市で水害発生。霞堤が原因と考えられている。

- ・『明治以前 日本土木史』（昭和11年[1936]）は「霞堤は天文11年武田信玄が釜無川筋に築造したものを嚆矢とし、その代表的のものは中巨摩郡龍王村に現存する信玄堤なり」とする。

→信玄の時代の信玄堤は霞堤（不連続堤）ではない。17世紀後半頃に築かれたと考えられる旧釜無川左岸堤防（かすみ堤）を江戸時代後期の地誌『甲斐国志』は信玄堤と呼んでいるので混同したか。この記述により、霞堤の起源が信玄（あるいは甲州）になったか？

☆牛柵類について

牛柵類は木材を三角錐形等に組み蛇籠で固定した牛類（図21）と、木材を組んで直方体の柵を造り、中に礫を充填した柵類（図22）に分けられ、堤防の川表側や欠所などに設置された。

取水口

- ・石井樋（佐賀市、近世初頭）（佐賀市教育委員会2006）嘉瀬川から佐賀城下へ、成富兵庫、城郭石垣技術援用

海岸堤防（防潮・防波堤防）

- ・水軒堤防（和歌山市、18世紀後半頃）（和歌山県文化財センター2010）高さ約4m、切込接石垣、胴木

5 近代

河川堤防

- ①前御勅使川堤防（南アルプス市、明治初頭～27年5月）（南アルプス市教育委員会2009）土砂堤防、根籠
- ②塩川下河原堤防（韮崎市、明治27年8月～昭和初年）（韮崎市教育委員会1998）石積み堤防、梯子土台、中柵
- ③藤井下河原堤防（韮崎市、明治27年頃計画～同44年までに完成）（図23、同2008）石積み堤防、梯子土台、木工沈床
- ④女鳥羽川護岸施設（松本市、近代）石積み堤防、片土台

☆土台（胴木）について

- ・治水・利水施設で最も古い事例は、石井樋天狗の鼻。亀の川堤防（和歌山県海南市、18世紀初頭）（和歌山県文化財センター1988）で1本土台使用し、石川除（4⑧）をはじめ江戸時代の施設で土台を用いた例はいくつかあるが、まだ一般的ではなかった。
- ・片土台は、明治後期の御勅使川（山梨県南アルプス市）の築堤工事で用いられていた（図24、斎藤2010）。

参考・引用文献

会津坂下町教育委員会2005『陣が峯城跡』

飯田市教育委員会2015『飯田市史跡 座光寺の石川除 確認調査報告書』

伊勢崎市教育委員会2015『史跡女堀』

宇治市教育委員会2009『宇治川太閤堤跡発掘調査報告書』

宇治市教育委員会2010『史跡宇治川太閤堤跡発掘調査報告書』

大石慎三郎校訂1969『地方凡例録』下巻、近藤出版社

大阪府文化財センター2008『八尾南遺跡』第2分冊

大阪文化財センター1980『亀井・城山』

大阪文化財センター1986『城山（その2）』

岡山県文化財保護協会2002『百間川米田遺跡4』

小田富士雄 2016 「おつぼ山神籠石」『季刊 考古学』第 136 号、雄山閣

小野義信 1992 「城館跡等にみられる土塁の覚書 ―菅谷城館の土塁を中心として―」『研究紀要』第 14 号 埼玉県立歴史資料館

小野木学 2000 「古墳時代の堤防の構造とその背景 ―顔戸南遺跡の事例から―」『美濃の考古学』第 4 号 美濃の考古学刊行会

北九州市芸術文化振興財団 2006 『中貫ミカシキ遺跡 4・真光寺遺跡 2』

岐阜県教育文化財団 2005 『柿田遺跡』

熊本県教育委員会 1977 『蓮花寺跡・相良頼景館跡』

高知県文化財団 2012 『上ノ村遺跡Ⅵ』

齋藤秀樹 2010 「堤防遺跡における胴木の変遷」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第 14 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2019 『旧利根川堤防跡』

佐賀市教育委員会 2006 『石井樋』

狭山池調査事務所 1998 『狭山池 埋蔵文化財編』

昭和町教育委員会 1997 『昭和町かすみ堤』

杉戸町教育委員会 2015 『町内遺跡発掘調査Ⅳ』

辻裕司 2008 「大阪府巢本遺跡の堤」『大阪府立狭山池博物館研究報告』5

徳島県埋蔵文化財センター 2017 『川西遺跡』

中川村教育委員会 2009 『理兵衛堤防』

長野県埋蔵文化財センター 2004 『国営アルプスあづみの公園埋蔵文化財発掘調査報告書 3―大町市内その 2―』

長野県埋蔵文化財センター 2013 『中野市川久保・宮沖遺跡―中野市内その 2―』

韭崎市教育委員会 1998 『塩川下河原堤防遺跡』

韭崎市教育委員会 2008 『藤井下河原堤防遺跡』

畑大介 2009 「信玄堤と伊那の治水事業」『治水と築堤・高遠石工』伊那市教育委員会

原真 2000 「中世城館跡に見る版築土塁 ―関東地方の事例を中心として―」『研究紀要』18 群馬県埋蔵文化財調査事業団

平泉町教育委員会 2004 『中尊寺跡第 65 次発掘調査報告書』

広瀬和雄 1991 「土木技術」『古墳時代の研究』第 5 巻、雄山閣出版

林重徳 2016 「水城」『季刊 考古学』第 136 号、雄山閣

福岡市教育委員会 1976 『鶴町遺跡』

松本市教育委員会 2010 『桐原城址 海岸寺遺跡』

南アルプス市教育委員会 2009 『前御勅使川堤防址群』

身延町教育委員会 2014 『大野堤防遺跡』

安村俊史 2008 「大和川の堤体構造」『大和川付替えと流域環境の変遷』古今書院

山口均 2001 「物集女城の研究 ―土塁構築のプロセスと比較検討―」『立命館大学考古学論集』Ⅱ 立命館考古学論集刊行会

李晟準 2009 「咸安城山城発掘調査の意義 ―韓国最大木簡出土遺跡の研究―」『大阪府立狭山池博物館研究報告』6

和歌山県文化財センター 1988 『岡村遺跡』

和歌山県文化財センター 2000 『栲田荘（窪・萩原遺跡）』

和歌山県文化財センター 2010 『県指定史跡水軒堤防』

渡邊理伊知 2016 「旧利根川堤防跡について～築堤工法の一事例～」『考古学からみた近世の治水技術』資料集、山梨県考古学協会

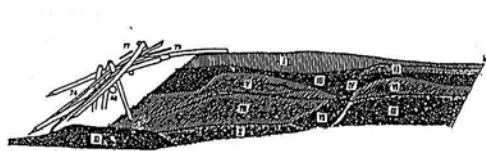


図1 鶴町遺跡の堤防状遺構
(福岡市教育委員会 1976)

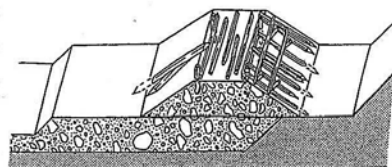


図2 顔戸南遺跡の堤防模式図
(小野木 2000)

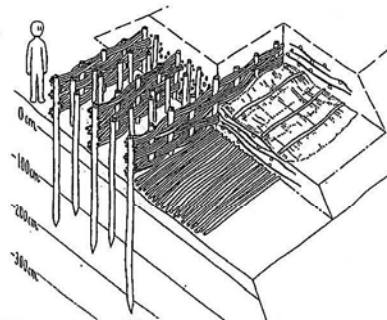


図4 百間川米田遺跡の堤防模式図
(岡山県文化財保護協会 2002)

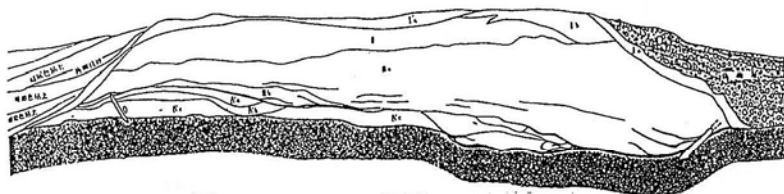


図3 亀井遺跡の堤防
(大阪文化財センター1980)

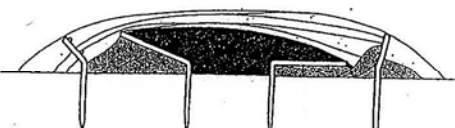


図5 寝屋川堤防模式図 (辻 2008)



粘土・シルト 構造材を含む層
砂礫 粘土ブロック

図6 柿田遺跡の堤防SW43 (岐阜県教育文化財団 2005)



図8 中貫川堤防
(北九州市 芸術文化振興財団 2006)

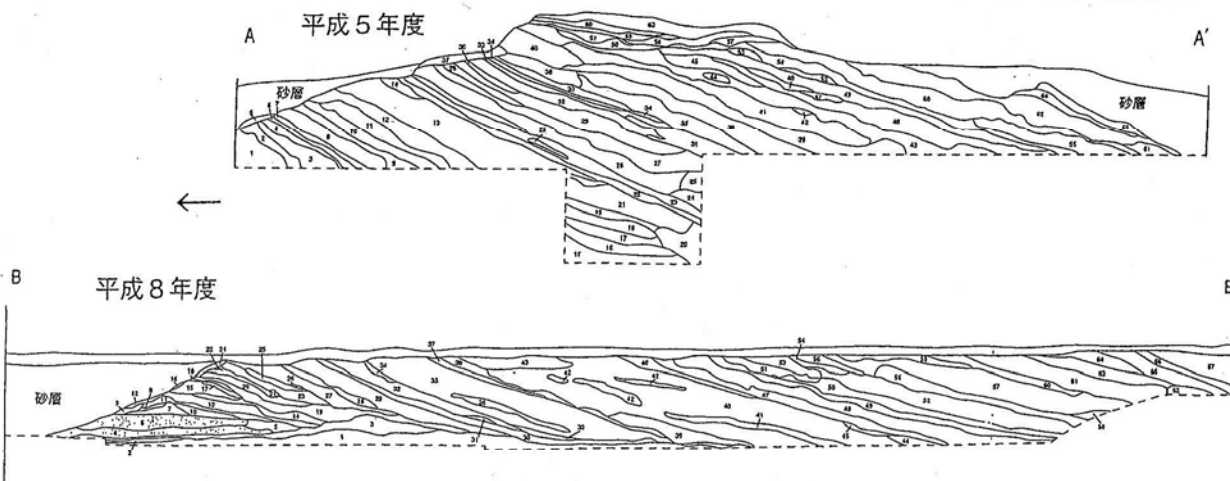


図7 古利根川堤防 (杉戸町教育委員会 2015)

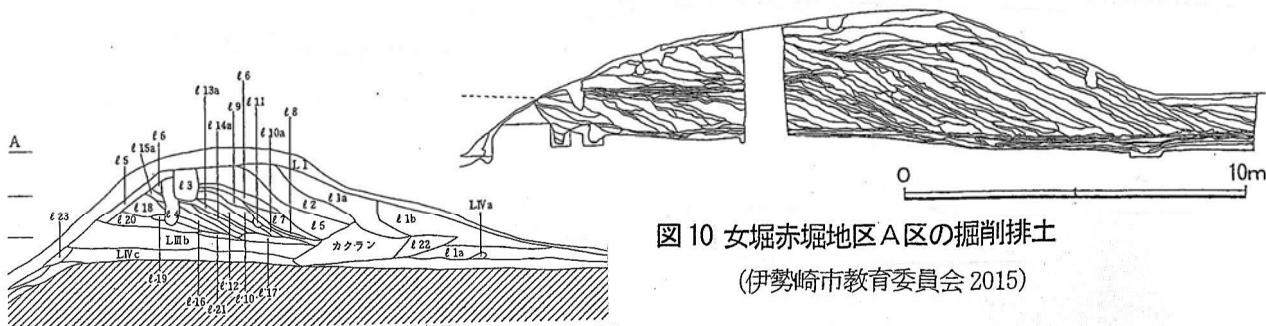


図9 陣が峯城跡の土塁
(会津坂下町教育委員会 2005)

図10 女堀赤堀地区A区の掘削排土
(伊勢崎市教育委員会 2015)

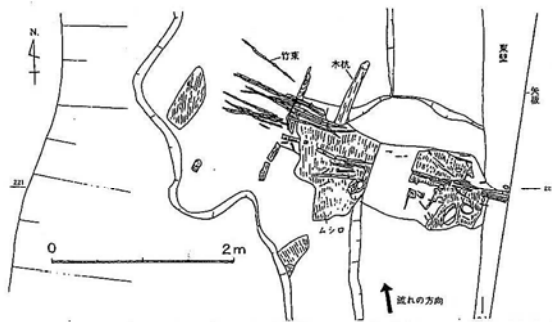


図11 城山遺跡の堰 (大阪文化財センター1986)

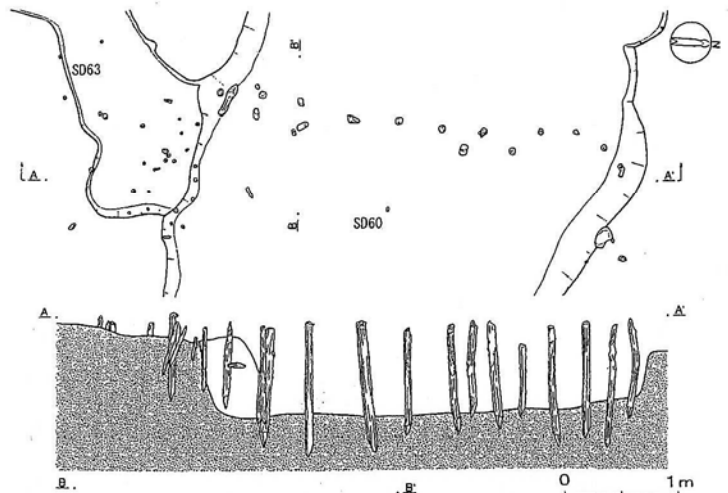


図12 柿田遺跡の堰SW49 (岐阜県教育文化財団 2005)

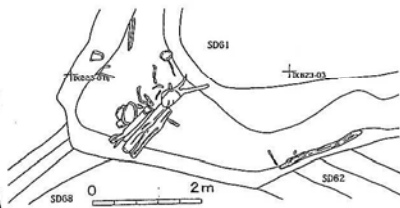


図13 川久保遺跡の堰
(長野県埋蔵文化財センター2013)

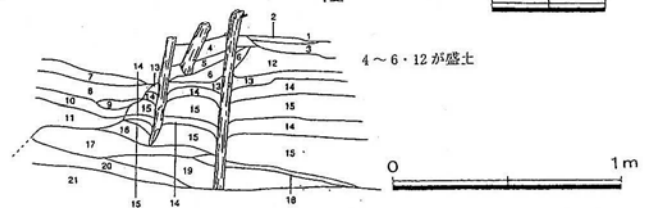


図14 宇治川太閤堤の石積み護岸
(宇治市教育委員会 2009 に加筆)

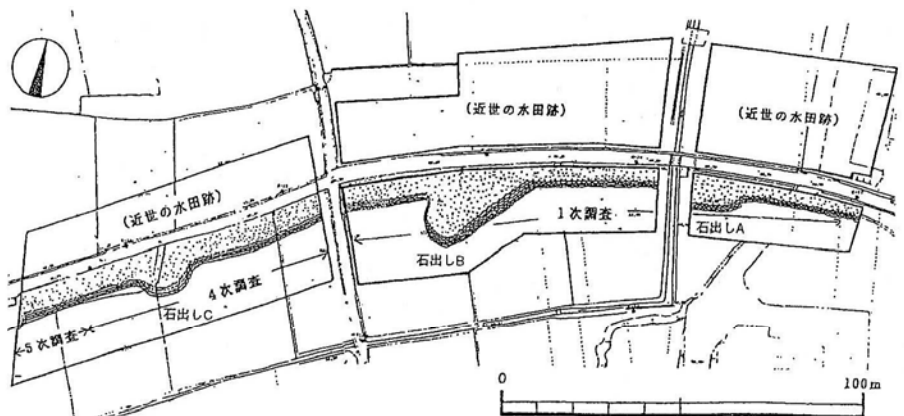


図15 紀ノ川護岸施設の概略図
(和歌山県文化財センター2000 に加筆)

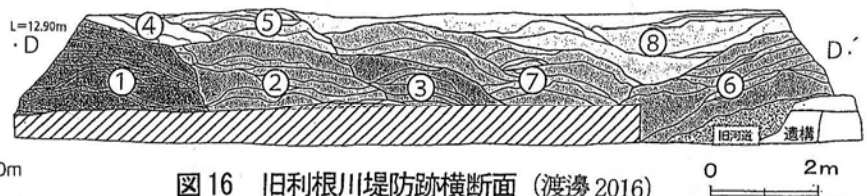


図16 旧利根川堤防跡断面 (渡邊 2016)

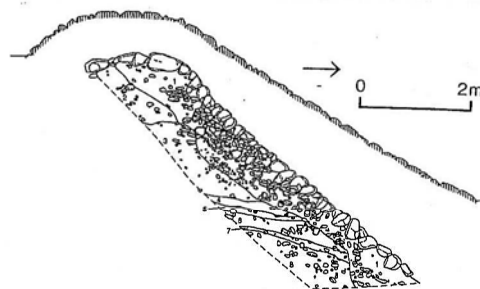


図17 大野堤防 (身延町教育委員会 2014)

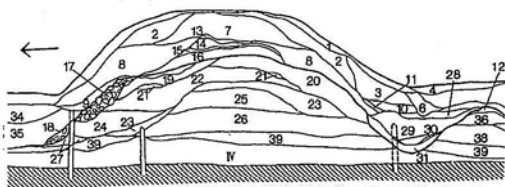


図18 かすみ堤 (昭和町教育委員会 1997)

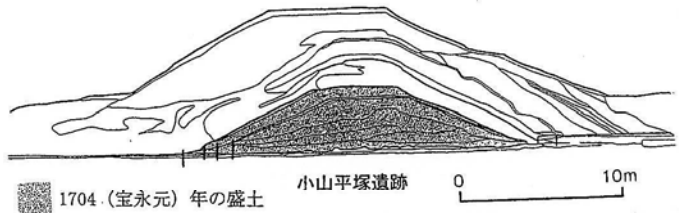


図19 大和川堤防 (大阪府文化財センター2008)



図20 乳川石堤
(長野県埋蔵文化財センター2004)

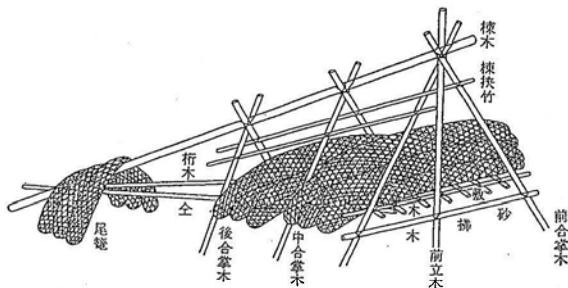


図21 『地方凡例録』の大聖牛 (大石 1969)

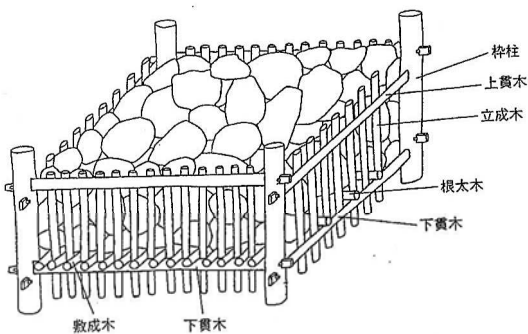


図22 杵類の部分名称 (身延町教育委員会 2014)

表1 伊那の近世牛杵類 (畑 2009)

番号	地名	河川名	年代(西暦)	牛杵類の種類
1	松島村(箕輪町)		宝暦9年(1759)～ 明和3年(1766)～ 天明8年(1788)～ 文化2年(1805)～ 文化2年(1805)～ 天保14(1843)～	中聖牛・合掌杵 中杵・続杵 大聖牛 菱牛 笈牛 中合掌杵
2	三日町村(箕輪町)		宝暦12(1762)～ 明和6年(1769)～ 安永2年(1773)～ 文化5年(1808)～ 文化6年(1809)～ 嘉永4年(1851)	中聖牛・中杵 合掌杵・中合掌杵 片杵・続杵 杵 大杵 菱牛 川倉
3	北殿村(南箕輪村)	天竜川	宝暦12年(1762) 明和3年(1766)	笈牛・中聖牛・杵 杵
4	芦沢村～下新田村(伊那市)	三峰川	寛政11年(1799)～	大杵・大牛・菱牛
5	下平(駒ヶ根市)	大田切川	元禄4年(1691)	河除牛木……
6	南・北下平(駒ヶ根市)	天竜川	享保13年(1728)	杵
7	北下平(駒ヶ根市)	天竜川	元文元年(1736)	笈牛
8	本郷村(飯島町)	天竜川	慶応2年(1866)	中聖牛
9	七久保(飯島町)	横沢川	文政2年(1819)	続杵
10	河野村(豊丘村)	天竜川	天保5年(1834)	大聖牛・中聖牛
11	小川村(喬木村)	天竜川	〈元禄頃〉	聖牛

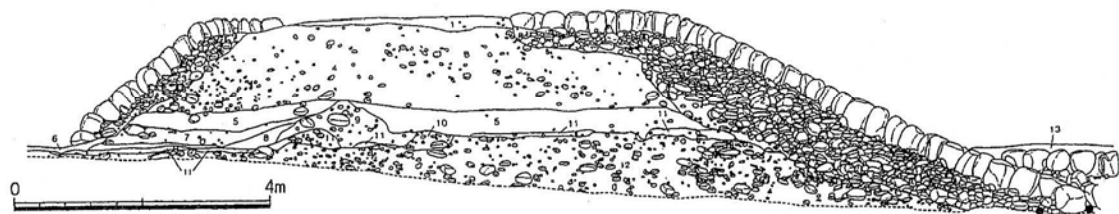


図23 藤井下河原堤防 (韮崎市教育委員会 2008)

明治23年

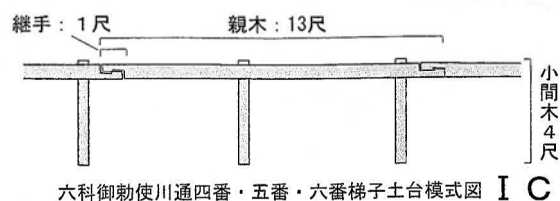


図24 御勅使川の片土台模式図
(斎藤 2010)

六科御勅使川通四番・五番・六番梯子土台模式図 I C c